# 2021 年度
# 春学期活動記録

早稲田大学　文化構想学部　社会構築論系

共生社会論　現代共生理論　森ゼミナール

目次

まえがき……(ⅰ)

第 1 部
2021 年度春学期　議事録集
1－A 「リスク」の再帰性を論じる ……3
1－B　現代の「不安」を論じる ……9
2－A 「境界」を論理的に語る……13
2－B 「領土問題」……17
3－A 「秩序」とは何か？ ……21
3－B　基本媒体について……27
4－A 「秩序」とは何か？ ……31
4－B　通信技術と芸術 ……35
5－A　教育とは？ ……39
5－B　経済とは？ ……45
6－A　政治とは何か……49
6－B　法とは何か ……53
7－A　真理と科学 ……57
7－B　恋愛とは何か？ ……65
8－A　芸術……69
8－B　都市……71
9－A　社会とは何か……77
9－B　日常性とは ……83
10－A　コロナと音楽のあり方 ……87
10－B　音とは何か……89
11－A　労働とは……93
11－B 「民主主義」とは何か？ ……101
仮想合宿　記録
A 班 ……105
B 班 ……113
C 班 ……123
D 班 ……133

第2部
Stephanie Bell(Kelton)
The role of the state and the hierarchy of money
を精読する ..... 145

# まえがき

新型コロナウイルスの登場で社会の 5 年分のオンライン化が一気に進んだだろう。数々の変化に社会だけではなく、一人一人の個人のレベルで対応していかなければならない時代になった。この半期の間、私たちはその変化の「余震」とも言える社会の現象の数々を見つめ、それらの将来を多方面から考えてきた。 本誌はその成果としてのゼミ活動のまとめである。

全体は三部で構成される。 第 1 部の内容は、 通常のゼミ活動での発表内容と議事録である。 森元孝著「理論社会学—社会構築のための媒体と論理ー」を基に各班が各テーマを独自に発展させ、発表した内容をまとめている。 また、第 2 部では同時にゼミ内で取り扱っていた「The role of the state and the hierarchy of money 」 の和訳を記載した。基礎的な単語の内容を和訳、精読が主な内容になっている。貨幣の役割と貨幣の階層性について検討し、表券主義、貨幣主義の立場からそれぞれを分析し貨幣とは何かについて考える内容となっている。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で授業内合宿を行った。合宿で取り扱った議題とディスカッション内容をまとめたのが第 3 部である。 第二次世界大戦時の日本の組織的失敗を分析した書籍、戸部良一ら著「失敗の本質」を読み、班にわかれ、それぞれの班のメンバーが自身の視点での報告を行い、質疑応答と議論を通してその理解と課題を深めた。

これから我々は、変化の激しい社会で生きていかなければならない。多くの壁が立ちはだかり、多くの選択を求められるだろう。しかし、過去と同じ失敗を繰り返してはいけない。歴史、過去に学び、より良い未来になるよう正しい選択をしていく必要がある。大きな流れに身を任せるだけでなく、多角的な視点持ち自分の意志を持ち、これからの社会を創って行く必要がある。これからの社会を生き抜く一つの指標として本誌が活用されることを望む。

2021 年 7 月 30 日

山下貴之

# 第 1 部
# 2021 年度
# 春学期
# 議事録集

| | |
|---|---|
| 「リスク」の再帰性を論じる | B 班 |

## 〈報告〉

リスクとは何か？
→過去のデータを元に確率計算可能なもの
→必ずしもネガティブなものではない

リスクと危険の区別

リスク
- 予測・対応可能
- 損害が行為に帰属
    - 原発事故

危険
- 予測が困難
- 損害が世界に帰属
    - 地震等の天災

再帰性とは？
→もう一度戻ってくる性質

危険⇔安全
but
リスクの対概念は存在しない

リスクの再帰性の例
- 株式購入と売却

**<u>ディスカッションテーマ</u>**
- 新型コロナウイルスはリスクであるのか、危険であるのか？
    - マスクをしない・飲み会をする等はリスク
    - 疾患後の症状、後遺症などは危険

発表班の意見

- コロナ自体は危険に当たる
- コロナを受けての行動選択はリスクに該当する

D 班の意見

- 新型コロナウイルス自体は危険である
    - 新型コロナウイルスがリスクに変わる瞬間って何だろう？
- 新型コロナウイルスはリスクである
    - 人間が環境に対して悪い行為選択をしてきた結果
    - だとすれば自然発生的な者ではなく、人工であり、「リスク」として定義できる

A 班

- 新型コロナウイルス自体は危険

- 新型コロナウイルスを受けた行動がリスクである
    - 新型コロナウイルスを避ける行動は選択できる
- 中国の衛生管理不足で出た災害であるならば新型コロナウイルスはリスクである

B 班

- 新型コロナウイルスはリスクでもあり、危険でもある
    - 新型コロナウイルスの終結とは？
        - 安全状態になった瞬間？
        - かかるリスクが限りなく減る瞬間？
        - ┗この結論が出ていない

Q.終結とは何か？（森先生）

A.コントロール可能な異常事態として定義できたとき

┗ワクチン接種？

┗ ┗今もわからないよね。

┗集団免疫獲得の瞬間？

┗ ┗結局少数の人はかかるよね

Q.リスクと危険は不可分なのでは？

（森先生）

- 東京電力の原発事故はリスクなのか？危険なのか？

Q.リスクから生じた「リスク」は危険として定義できるのでは？
時間軸によってリスクと危険が変わる可能性をはらんでいる

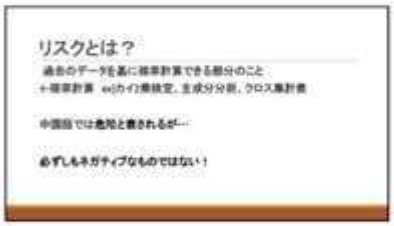
Q.日本語に置ける危険・リスクの訳語は？
┗なぜ生じるのか？文化的側面から指摘できないか？
A.損害が「降ってきた」ような錯覚を得る？

そもそも予測が客観的に（多くの人に共有される形で図ることが難しい）

〈資料〉

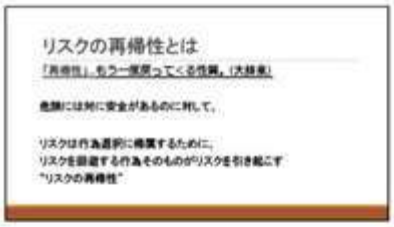
2021/7/26

1




2

3




4

5

6

1

7

| | |
|---|---|
| 現代の「不安」を論じる | C 班 |

## 〈報告〉

〇発表内容

- 客観的な出来事と「不安」の関係

┗社会の構造的な問題

- 不安の無限連鎖→現代である
- 行為・不安・リスクは相互的な関わりの上で成り立っている
- 時の二重性に現代人は不安を覚える（＝「不安」の定義）
    - 迫りくる時間
    - 1 つの線のような時間

┗不安は構造的なものであり、回避不可能

┗未来事象の出来事も現在の時間軸で考えるために不安

〇ディスカッショントピック

〇SNSやネットが現代人の不安を増大させている？

- 触れる情報の増大
- 他者との比較による不安

D 班

- 不安を消すことができるのか？
    - 不安を消そうとした行動の結果にも不安が伴う
        - 例えばスマホ遮断

A 班

- 不安から問題定義して不安を問題として捉えられることが良い
- 多くの人が不安をただ不安として消化している

C 班

- 不安からは逃れることができない
    - 現代人は情報が多い

B 班

- 人間の欲望は無限大
- 昔は手段が少なかった
- 現代はメディアなどから生まれる比較による不安が発生する

D 班から A 班に対する質問
→問題定義できた経験は？
A.コミュニティをつくる、SNS で分断された人々が再びまとまる
ex.グレタさんの例

森先生「不安とは何か？」
Q リスクは行為、危険は世界に帰属するが、不安、情報は？
・コミュニティから離れる不安
・理想から外れる不安
・学歴などアイデンティティの喪失の不安

この理想、不安の帰属点はどこから？
→ない。自分の中、家族などの外部から双方から影響を受ける

Q. 情報とは？

- 自身の認識構造が変わること

既に知っていることは認識行動を変えず、情報とは呼ばない

〈資料〉

現代の「不安」を論じる

3年　井上采香

・客観的な出来事と「不安」の関係⇒社会の構造的な問題
・不安の循環，不安の連鎖…不安が不安を呼ぶ，不安の無限反射（予言の自己成就）
・「リスク」と「不安」
　⇒リスクの発生因は行為
　　不安は，損害が生じる前の心的ダメージ

行為⇔不安(体験)⇔リスク(出来事)

　EX.「くよくよするという行為選択が不安を生むリスクを生む」

・未来の出来事が今を構成する要素の１つとなっている
・不安は近代社会を構成する基本的特徴
・「進行していく時」と「迫り来る時」
　⇒この時の二重性から逃れられない近代人は不安を抱く。
　　不安は構造的必然，社会の一部

・近代人には，将来への確信が稀薄
　⇒未来への視線はあるが，それが起こらない現在に関心を持つ。
　　未来の出来事を，現在を編成する要素として取り込んでしまう。
・未来に向けて何かを達成しようとするとき，未だ起こっていない出来事を現在と結びつけることが漠然とした不安を生む
・未来の到達点にだけ視線を向けることができない近代人は，今その場の出来事や行い（疑似行為）に踊らされる

○「不安」とは何か？
近代社会の基本的特徴，時の二重性によって生まれるもの，未来の出来事が現在を構成する要素になっているから生まれる，近代人の日常
○「現代の」とは何か？
物質的繁栄や発展が行き詰まりを見せる現在，不安が人々の日常となっている現在，未来に漠然とした不安を抱える現在
ーだからこそ，未来を考えるときにどうしても現在と結びつけ考えてしまう？

意味ある面白い事例

○SNS やネットが現代人の不安を増大させている？

・すぐに世界中の情報にアクセスできる状況が不安感を増大させている可能性
　EX. 犯罪のニュースを目にすることで、自分の身にも降りかかる危険を感じる
　　環境問題やテロの情報を知り、将来への不安を身近に感じる
・スマホ依存症は脳のはたらきに影響が出る
・ネットには不安をあおる情報が多い
・SNS で他者の行動が目に入り、無意識のうちに自分と比較してしまう

⇒現代人とインターネットは切っても切り離せない関係になっている。
　不安が日常と化した現代人の不安感はさらに増大する…？

| | |
|---|---|
| 「境界」を論理的に語る | A 班 |

## 〈報告〉

**スペンサー＝ブラウンの「指し示しの算法」について**

・「区別」＝境界を画定すること 「日本」とそれ以外を区別
・区別の「取消」 横断の法則 「それ以外」の取消をしている
・区別の「圧縮」 最終的に一つに圧縮される
・区別の「誇張」 圧縮の逆の操作
・区別の「閉鎖」 区別した「日本」が「本当の日本」だとさらに区別される
→無限に繰り返せるのでどこかで切り上げる必要がある

**ディスカッションテーマ**

**「どこからどこまでが日本人？」**

→国籍による分類、地理的分類、民族的分類

C班：制度上の日本人→国籍
精神上の日本人→長く日本に住んでいる外国籍の人

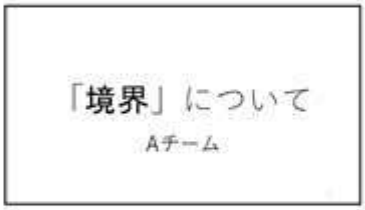
D班：日本人だというアイデンティティなどの人の内側と制度などの人の外側から区別できる

B班：比較対象があるからこそ日本人だと区別される
日本人だと区別する必要があるのか？

A班：制度、精神
国籍 ex)オリンピック
B班の意見に対して→比較対象、つまり「それ以外」を見るから区別できる

〈資料〉

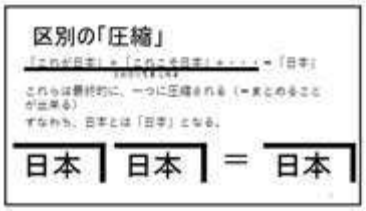
2021/7/27



1

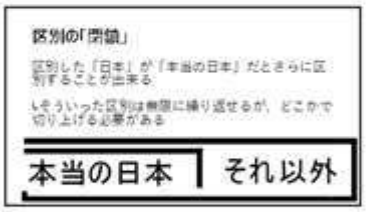
2

3



4

5



6

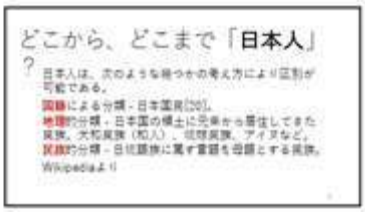
1

日本人

7

Discussion theme
どこから、どこまで 日本人 ?

8


どこから、どこまで「日本人」？
日本人は、次のような幾つかの考え方により区別が可能である。
国籍による分類 - 日本国民[20]。
地理的分類 - 日本国の領土に元来から居住してきた民族。大和民族（和人）、琉球民族、アイヌなど。
言語的分類 - 日本語族に属す言語を母語とする民族。
Wikipediaより

9

Discussion theme
どこから、どこまで 日本人 ?

10

| | |
|---|---|
| 秩序とは何か？（1） | B 班 |

## 〈報告〉

・原秩序
知覚の差異を区別
　知覚は常に変化→区別の連続
2. 空間の区別
直接世界と非直接世界　空間的条件の有無
疑似同時性の作用
3. 時の区別
同時世界　先行世界　後続世界
自分の立ち位置、状況の把握ができる→秩序づけられている
4. 媒体と体系
知覚の差異を区別できない＝エントロピー最大の状態
無秩序→一定の制約することで秩序づけ

**ディスカッションテーマ**
**「世界は秩序化しているか？」**
　現在は時空間の区分が困難　ex)手紙、電話、VR電話
　インターネットやSNSなど工学の飛躍的発展によって意味づけの範囲が広くなりすぎていて逆に無秩序化しているのでは？

C班：無秩序から必要性があれば秩序化される
　　現在の世界は秩序化されているのでは？

B班：現代は秩序が乱立化している
　　インターネットによって人々が価値観や考えの共有
　　→これまでの国家による大きな秩序がゆらいでいる

D班：秩序化には細分化と画一化がある
　　秩序化されているけどされていないのでは？

A班：現代は秩序化されていない
　　また、これまでにも秩序化されている時代はないのでは？

森先生：時間と空間を超えた You-orientation と They-orientation

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

1

| | |
|---|---|
| 尖閣諸島、竹島、千島列島 | D 班 |

## 〈報告〉

●北方領土→日本とロシア間
1855 日露通好条約　北方領土 4 つ日本
1945 日ソ中立条約破棄　ロシアが占領
1951 サンフランシスコ平和条約で　千島列島権利、請求権放棄

現状：日本国籍持つ人なし　両国で合意あるも、返還の目処なし
日本；返還されるべき、千島はロシア領　北方は日本
ロシア；WWⅡ以降　ヤルタ協定

●尖閣諸島→沖縄と中国大陸、天然資源、国防の一線、両者対立
日本；歴史上、国際法上
中国；明代から中国固有、日清 W の際は台湾と尖閣は中国領土、古文書の記述

●竹島→韓国と日本のはざま、漁業資源
現状：実効支配、武力制圧
近代国際法上領土取得の要件
①国家としての領有意志
②その意志の公示
③適当な支配権力の確立
日本；17 世紀日本が領有権を確立
韓国：1952 李承晩ライン、昔の記述、日韓併合

「予言の自己成就」
最初の誤った状況の基底が新しい行動を呼び起こしその行為が当初の誤った考えを真実にする
行動まで→トマスの公理
新たな状況→マートンの自己成就予言
領土問題に置き換える→
**トピック『予言の自己成就をせずに領土を確定させることは可能か』**

**B班**

案:国際司法裁判所の活用、国連の介入

　→予言の自己成就を潰す

**C班**

不可能→プロセス、裁判所に持ちこむ事態が予言の自己成就

**A班**

結局、どちらかが予言の自己成就

双方にとって利益があるようにする

**D班**

国連は上位存在足るのか→アメリカの強権

**森先生**

三件とも水準が違う

●北方領土

国後と択捉は日本の領土ではないと言った

ロシア人はすでに住んでいる

太平洋戦争ではロシアと戦っていない、日ソ中立条約を一方的に破棄してきた、ヤルタ協定

アメリカとイギリスがロシアに頼んだ

イギリスの外交文書　日本を抑えるために確定させないほうがいい

●竹島

サンフランシスコ平和条約　（アメリカは韓国を呼ばなかった、韓国も日本の一部だったから。）

朴正熙　日韓基本条約、李承晩ライン

国際司法裁判所にかかったら不利だとわかっている

●尖閣諸島

国際司法裁判所では日本が不利？法的に。

アメリカの介入は中国を抑えるため。

日本の領土は　カイロ宣言？ポツダム宣言？

本州と北海道と九州と四国とその周辺　アメリカイギリス中国が決める

1972 国交回復　尖閣諸島問題を避けた

1989 天安門事件以降　関係性が変化、2000 年ごろには GDP も抜かれた

最近の中国の動きは危ない ex.香港

中国が先に上陸して占領したらもうダンマリ？

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

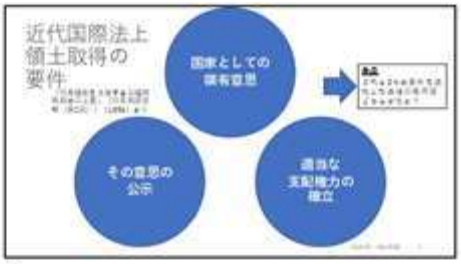
1

What is 竹島?

7

現状

8


近代国際法上
領土取得の
要件
国家としての
確有意思
その意思の
公示
適当な
支配権力の
確立

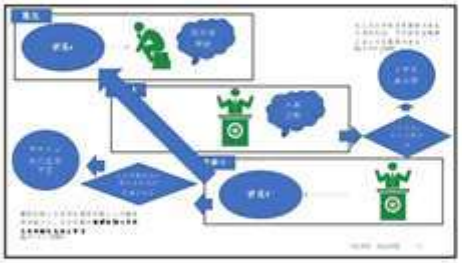
9

歴史（日本側の認識）

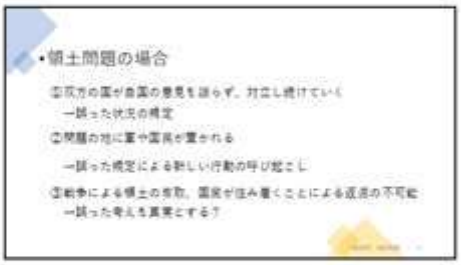
10

予言の自己成就
• 予言の自己成就とは
最初の誤った状況の規定が新しい行動を呼び起こし、
その行動が当初の誤った考えを真実なものとすること
• 自己成就予言とマートンの公理の違いは？

11



12


・領土問題の場合
②双方の国が自国の意見を譲らず、対立し続けていく
→誤った状況の固定
②問題の地に軍や国民が置かれる
→誤った固定による新しい行動の呼び起こし
③戦争による領土の奪取、国民が住み着くことによる返還の不可能
→誤った考えを真実とする？

13

ディスカッショントピック
「予言の自己成就をせずに領土を確定させること
は可能か？
→可能ならどのような方法があるか？

14

・参考文献

15

| | |
|---|---|
| 基礎媒体を整理する | A 班 |

## 〈報告〉

身体という媒体、時間の区別
言語という媒体　感覚体験を別の個体に伝達する
言うことは行うこと＝空間を構成
帰属先としての人間
行為のプロセス
①主題化：身体で何かが起きる
②解釈：生まれた何かを身体から言語化
③動機解明：行為と言語化でヒトが結びつく

**トピック『悪いつながりになるような媒体は他にどのようなものがあるか』**

ex)紀州のドンファン殺人容疑
「つながり」は様々な媒体によって架橋されるものではなく結局は媒体「貨幣」
悪いつながりになるような媒体は他にどのようなものがあるか

---

**森先生**　女は体を媒体に　化粧＝身体を加工
　　高利貸しは他者との密接な関係が必要
　　アルコール、セクシュアリティによる関係

**B 班**　テーマの線引き難しい
　悪い＝主観
　どんな媒体でも悪いものになる→善悪の判断基準は法

**C 班**　良い悪いは絶対的基準にならない
　媒体の使い方次第

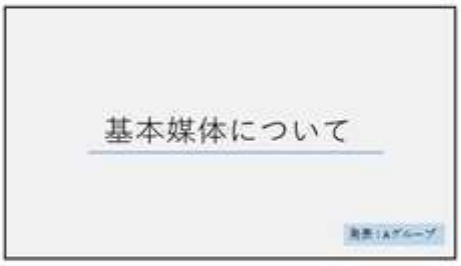
**D 班**　つながりの 2 面性

**A 班**　媒体は概念であり、価値判断の対象にはなり得ない

**森先生**　性善説　時代、状況によって個人という媒体は変化する
→身体に連続制はあっても
法律の中では個人は一定←逮捕された状況で、罪を犯した
自己は一定不変ではない(近代的なイデオロギーとは相反する)

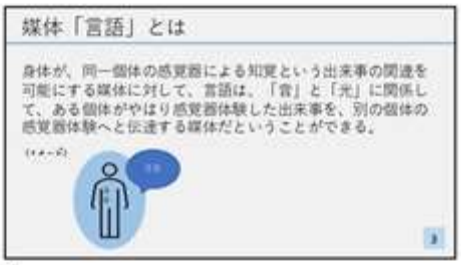
〈資料〉

2021/7/27



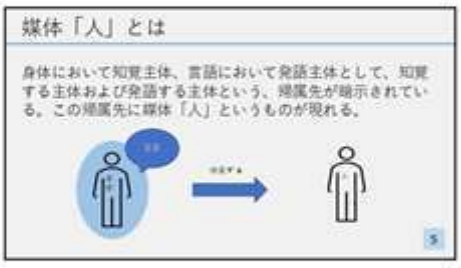

1

2




3

4



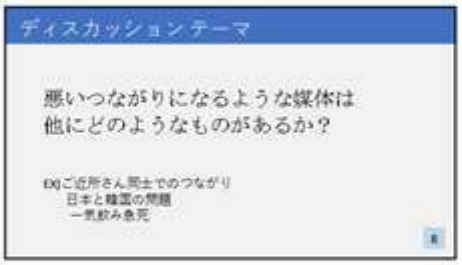

5

6

1

「紀州のドン・ファン」殺人容疑
7

7


ディスカッションテーマ
悪いつながりになるような媒体は
他にどのようなものがあるか？
Eq)ご近所さん同士でのつながり
日本と韓国の問題
一気飲み急死
8

8

| | |
|---|---|
| 秩序とは何か？（2） | C 班 |

## 〈報告〉

要点：私たちはどのように世界を知覚しているか

1. 原秩序

Q. 世界そのものに秩序はあるのか

A. 秩序のない世界として定義している

2. 空間の区別

目で見える範囲：直接世界

目では見えない範囲亜：非直接世界

→包含して、同時世界

3. 時の区別

時間についても同じように「遠近」によって秩序化できる

→ただ時における遠近は無限に連鎖している

4. 媒体と体系

私たちは時間と空間の両面から世界を認識している。

Ex)熱放射→豆電球は熱エネルギーとしても使用されている

**<u>ディスカッションテーマ</u>**

暗号を解いてください

1101 101 1001 10100 1 1110 10100 101 1001

A 班：二進法から十進法にしたが、答えにはたどり着けなかった
（なおすやり方を間違っていた）

B 班：名探偵となった

D 班：同じく名探偵

C 班：やり方もあっていて答えは名探偵です

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

1

7

| | |
|---|---|
| 芸術と通信工学 | D 班 |

## 〈報告〉

シャノンとは何か
Claude Elwood Shannon
シャノンとは数学者である
より「リアル」
情報→インターネット→情報
　暗号化　　復元化
芸術
送り手と受け手の間のリアルを追求する

送り手→芸術(絵画、書籍、音楽など)→受け手
　記号化　　解釈
解釈に差異が生じる可能性がある

芸術は情報とは違い、受け取る側によって変わる（完全に一致することはない）

コロナ禍の芸術
例えば、オンライン展示会、オンラインライブ
→空間と時間を超越する

通信技術と芸術の関係
芸術の芸術性は部分により全体を表象しようとしているところに存在する

**ディスカッションテーマ**
芸術を排除し、通信技術のみの社会になるとしたらそれはどのような社会であるか

また、それは今の社会より良い社会なのか
A 班：みんな同じ価値観になるので逆転なくなり、つまらなくなる
B 班：通信技術が発展したとしても芸術が排除されること自体違うのではないか
　イミテーションゲーム：人間と機械との区別がなくなってしまう

D 班：芸術はなくならない
C 班：100%情報が伝達したとしても解釈は変わってくるのではないか

森先生のコメント
通信技術が進化しているというのは、目で見ることもできないものまで知覚させられるということである
我々凡人にとっては、部分であると感じるかもしれないが、芸術家にとっては全体を表現しているのではないだろうか
アカペラの動画は果たして何と呼べば良いのだろうか

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

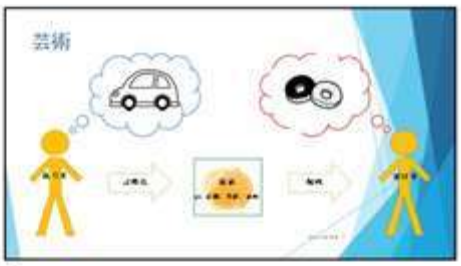
1

シャノンの通信のモデル（余談）
ノイズ

7

より「リアル」を目指す通信工学

8


芸術

9

この絵を見て、皆さんは何を想像しますか？

10

想像した全体性の相違

11

コロナ禍の芸術 ~ディスタンス・アート~
例えば
オンライン展示会、オンラインライブ、リモート演奏など、・・・
→好きな時間に、好きな場所から作成、編集し、鑑賞する
つまり、空間と時間を超越する
では、なぜ空間と時間の超越は可能となったか？
＝「よりリアル」を追求した技術が発達したから

12

| | |
|---|---|
| 「教育」とは何か？ | B 班 |

## 〈報告〉

**前提形成～体験と行為に関して～**

世界＝「出来事の集合」

┗連関を分節化することで諸媒体が再帰・連関する

体験＝世界に帰属

行為＝人に帰属

※リスクと危険の話に似ている

**行為の解釈の仕方**

- ● 出来事が時間軸の中で起きる
  - ○ その時間軸の中で起きた「出来事」を解釈し、主観性が形成される

**例として～会社に行くまでのプロセス～**

┗身体性のプロセスを言語化の水準で解明する

**人間の教育のプロセス**

- ● 人間を教育する＝行為プロセスに行為プロセスで関わる
- ● 教師の行為プロセスが生徒の行為プロセスに対して介入する

媒体「人間」の形成

┗子供と大人の間で「教育」が介在することによって形成される

ディスカッションテーマ

**「どのような媒体「人」がいると健全に生育していくのか？」**

┗大人と子供の間での媒体「教育」の理想のあり方

┗例えば虐待の話

グループ D

- 「健全に生育」を社会の一般的な規範を守ると定義
    - 例えば犯罪
- 多くの人に触れ合い、自身の規範を多くの間で相対化された規範とすることがいい
- ＋で周りの大人や社会のシステムから規範を逸脱したときに規範逸脱の価値判断と行動変容を促せるような人が存在しているといい

グループ A

- 様々な媒体『人』と出会う
    - 負の経験を乗り越えた人
    - 間違いを指摘してくれる人
    - 問題を共有できる（悩みを相談できる）人
    - 自分を受け入れてくれる人
    - 健全な生育、教育とは

グループC

- 「健全」の定義をどこに置くか？
- 自分を受け入れてくれる人がいるといい
    - 人から人に与えるのではなく、受け入れるというのは面白い
- 道を外したときに注意してくれる周りの人の存在

グループ B

- 子供が最も関わる親と先生
    - 親は子供と深くかかわる
        - 指導要領がない
            - ┗人によってばらばら
        - 軸をもって教育する必要
            - 子供も軸がぶれる可能性
            - 精神的に「軸がぶれる」＝犯罪行為
            - なくすためには「受け入れる」ことが必要
    - 教師は色々な生徒と接していく
        - 指導要領が存在し、それに則って教育する

森先生より

- 親の教育はどうなのだろうか？
    - 生まれたときからそうなるのが当たり前

- 例えば麻生さんや安倍さんは親がいて、教育をされているが、「健全」と言えるのか？
    - ○ 親からの同様の「人」の再生産の構造になっている
    - ○ いわゆる封建制のような教育構造になる
    - ○ 政治家などは典型的な例
        - ■ 親と同じことをする
- 菅さんは親は政治家ではない
    - ○ 息子を見てみると怪しいかも？
    - ○ 「健全」なのか？
        - ■ 「健全」でないとすると、何が間違いなのか？

前田さんより

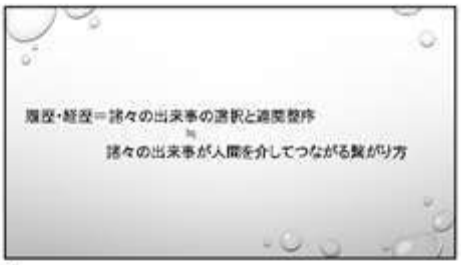
- 早稲田出身等の高学歴の再生産は「健全」なのか？
- ネグレクトだけではなく、過保護も健全な教育といえるのか？

〈資料〉

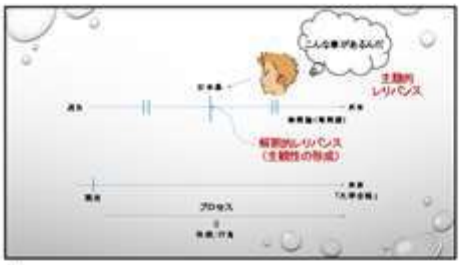
2021/7/27

1

2




3




4

5

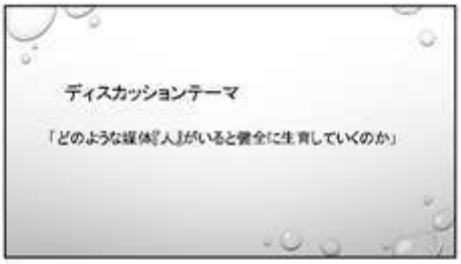
6

1

子供/大人
↑
教育が介在
媒体「人間」の形成
①大「行為」→子「行為」
②大「行為」→子「体験」
③子「体験」→大「行為」
④子「体験」→大「体験」
例)虐待体験のある大人は
子供に虐待しやすい

7

8


ディスカッションテーマ
「どのような媒体『人』がいると健全に生育していくのか」

9

| | |
|---|---|
| 「経済」とは何か？ | C 班 |

## 〈報告〉

経済とは人の必要と不必要により己が配置される仕組み、売ると買うの行為体系
市場とは売り手と買い手が取引を行う場

経済は人の行為の集合であり、市場は行為がおこなわれる場である

貨幣とは？

1. 計算単位
2. 交換手段
3. 価値保蔵手段

「貨幣の流速調整が経済体系調整」という記述の説明

MV＝PT

右辺はほぼ変わらなくて、左辺は貨幣量動かして価格をコントロールできるのでは？

貨幣法定説
結局貨幣は信用に関わる
ディスカッションテーマ
**「世界統一通貨の是非と可能性」**
メリット

- 両替する手間が省ける
- 為替相場の影響を受けずに安定した貿易ができる

デメリット

- 自国で金融政策を行うことができない
- 経済格差と物価の違いへの対応

仮想通貨が統一貨幣になる可能性も

D 班

世界統一通貨が国定通貨に置き換わるのではなく、新しくできた場合の前提

- 自国の貨幣に対する信用がない場合は使うメリットが薄い
- 逆に自国の貨幣に対する信用がない国ではメリットが厚く、使うかもしれない

A 班

- 難しい
    - 国内の政治的な統一が取れいない国も存在
    - 国家間の統一も取れていないのに統一は難しい

C 班

- ユーロにおいても脱退等の問題が生じている
    - ┗実現性がむずかしい
- 運用などの点においても難しい

┗実現性としては難しいのではないか

B 班

統一通貨は難しい

- 価値基準がない
    - 世界の統一された価値基準が存在しない
    - 統一するのは難しい
- 暗号通貨に対する認識等を深めていくべき

森先生から

- EU 加盟国には統一された通貨が存在するのか？
    - イギリスはマーストリヒト条約に加盟せずに使用しなかった
    - デンマーク・チェコ・スロバキア・ポーランド・クロアチア等も使用せず
        - ユーロを導入したくてしょうがないができない
        - なぜ導入できないか？

┗マーストリヒト条約におけるユーロ導入の条件を満たさない

※マーストリヒト条約におけるユーロ導入の条件

1. インフレ率が EU 加盟国の最低3か国の＋−1.5%以内
    a. ドイツ・フランス・ベルギー・オランダ等が低い
2. 財政赤字は GDP 比 3%以内
3. 国家の累積債務が GDP の6割以下

- 統一通貨導入のためにはまず統一国家を形成する必要がある
    - ○ アジアにおいて可能か？
        - ■ 日本と中国、韓国などの間で統一国家形成されるか？
    - ○ 戦争の原因となる可能性
- 貨幣発行自由化論のような論点の方が健全であるか？

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

1

| | |
|---|---|
| 政治とは何か？ | A 班 |

## 〈報告〉

・「力」の発生
人が人を動かすと関係がある限り、権力が発生している

・暴力の究極のパラドクス
暴力行使→支配するつもりが暴力によって支配できなくなる

・支配の正当性
①カリスマ的支配
巨体、理知、粗暴、、、
②伝統的支配
しきたり、習わし
③合法的支配
人は自分ではない、組織の決定によって自らを消し去ることによりその支配を正当化する

・権力の再生産
権力は暴力を抑えるために存在する、力は別の力でしか抑え込めない
→権力を抑えるにはまた他の権力が生産される
例）政治家の子供が政治家になる

世界各国の政治体制

ディスカッションテーマ：コロナ対策を踏まえて、日本の政治、政治体制をどう評価するか

・C 班
決断が遅い
→議院内閣制で実行までに時間がかかる
→大統領制の方が実行が早い

・D 班
評価できない

遅すぎる
→発言力が弱く
→カリスマ的支配が必要であった
→合理的支配である
→改善するには、伝え方を改善する（強く言う、わかりやすく言う）

・B 班
評価できない
→対策が後手になっている
←議院内閣制で実行が遅い
政治の性格、システムがきちんとしてない
→信用できない

・A 班
発言の信頼度がない
←曖昧、不適切

森先生：イギリスも議院内閣制　ファイザー(イギリス)のワクチン
　　日本は頼んで輸入するという大きなハンデ
　　日本はワクチンに力を入れていない　コロナ以前の政策が結果論だが間違い

〈資料〉

2021/7/27

政治とは何か

発表グループ：A班

1

「力」の発生

人が人を動かすという関係がある限り、権力（political power）が発生している。

2

暴力の究極のパラドクス

暴力により人が人を統率し支配する可能性があるが、統制に反する身体を切断、さらには損傷させてしまう可能性がある。

CF）敵対者たちを投獄し処刑することで成り立っている恐怖政治

暴力行使の抑保 ➡ 支配関係を可能に ➡支配の正統性の必要性

3

支配の正統性

①カリスマ的支配
人は、君主、指導、思想、英雄、理想などにより他人を超えることで、
それはまさしく他人の支配として正当化される

②伝統的支配
しきたり、習わし、権威に基づいて正当化される

③合法的支配
人は自分ではない、すなわち組織の決定として、自らを消しおることにより
その支配を正当化する

4

権力の再生産

権力は、正当性を伴って、人が人に何かをさせるという行為であり、
その場面ごとに人が現出するということにより、権力の再生産は、
人の人支配それということである。

例）政治家の子供が政治家になる

権力 ➡ 権力 ➡ 権力 ➡ 権力・・・

5

世界各国の政治体制

・大統領制

・半大統領制

・議院内閣制

・一党独裁制

6

1

アメリカの政治体制

フランスの政治体制

イギリスの政治体制

中国の政治体制

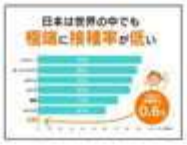
7

ディスカッションテーマ

コロナ対策などを踏まえて、日本の政治・政治体制をどう評価するか？

8

参考資料




9

| | |
|---|---|
| 「法」とは何か？ | B 班 |

## 〈報告〉

法は権力と共生
互酬性と相補性
物々交換は特別な相補性
法は互酬的関係　時間の隔たりがある
法は権利義務関係を生み、未来への予防と過去の救済
確実性の担保は武力の行使とその可能性の威嚇
制定者：国会　執行者：内閣　判断者：裁判所

**ディスカッションテーマ**
①法秩序と社会秩序は同じか、違うのか
②違うのなら、法秩序の他に社会に存在するものはなにか

C 班
①被っている部分もある
②暗黙の了解、風潮、伝統
宗教は明文化されているもの
→これは法秩序？

D 班
①社会秩序の中に法秩序がある
②暗黙の了解→地域ごとのルール、個人間の明文化されていないルール

B 班
社会的秩序の中に、文化的な秩序がある

A 班
①重なっている、違うところもある
②宗教は社会秩序

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

1

媒体「法」と法体系
権力も法も人と人の関係。
リスク回避、不確実性の解消が必要。
確実性の担保は、
【暴力の行使】と【その可能性である威嚇】

7

媒体「法」と法体系

8

媒体「法」と法体系
「法」は諸々の法の総により体系を構成。
成文化されていなくても、治験化は可能。
法意思［秩序保全］［原状回復］［損害賠償］
企図する事象［人を殺す］［窃盗行為］
一法の違背あるいは遵守は、規範そのものの問題ではなく、
規範の違守or遵守の事実性の問題。
一義的の解決

9

媒体「法」と法体系
↓
道具の使用者は人、帰属点は人・法人・国家
法に対応する行為が規定的かそうでないかは、
状況において人にどう帰属するか=人が判断する

10

媒体「法」と法体系
➡制定者国会(立法権)
➡執行者内閣(行政権)
➡判断者裁判所(司法権)

11

ディスカッションテーマ
①法秩序と社会秩序は同じか、違うか。
②違うならば、
法秩序の他に社会に存在するものは何か。

12

| | |
|---|---|
| 「科学」とは何か？ | D 班 |

## 〈報告〉

科学＝真理の発見

　　新しい出来事を体験

科学の進歩＝新しい出来事の発見の連続、体験の連鎖

　　媒体「真理」による媒体

　　（体験→世界に帰属　　行為→人に帰属）

新しいできごと　　真理・非真理の算出

　　発見による非真理の淘汰　非真理の中の真理も「非真理」

真理＝命題の審議の区別からもたらされるもの

　　近代科学　事実プラス仮説命題

　　反証可能性（非真理）　Cf）背理法

「 ㅅ　ではないから B　は真理」

真理の無限訴求性

　　真理の根拠はどこまでも「根拠付け」を疑うことで遡及可能

→この区別によって科学は体系化

↓

研究の重要性

　　研究＝真理と技術の重要性

将来において何が評価されるかわからない時代

＝種となる基礎研究の重要性

⇔異本における研究の現状

　　被引用補正論文数の低下（No.4 →No.9）

　　（サイエンスマップのうち　33%のみ、アメリカは　66%、ドイツは　51%）

参画領域数の少なさ
→ワクチン開発においては？
　　日本はどの段階に問題があるのか？（他国比較）
　　ワクチン開発プロセスが遅い。
アメリカは国防総省・保健社会福祉省からの支援→mRNA ワクチン開発
日本は 1000 億円を投じてワクチン生産工場設立→政府が手を引いて続かなかった
安全保障の 1 つ？

1体感染症危機意識の低さ
　新型インフルエンザパンデミックの経験
　　体制強化
　生産体制の継続性
　→感染症に対する意識の差＝安全保障への備え？

2産官提携不足
3政府の支援金額不足
4政府の支援金拠出方法問題（先行きの不透明性）
5認可体制

日本学術会議と内閣府

真理＝理想的発話状況の中に見出される（ハーバーマス）
-ハーバマスの定義- 1 無制限の参加機会
 2 平等の発話機会
 3 発話者の誠実性の想定
 4 コミュニケーション統御する様々な発話能力の必要性

ディスカッションテーマ

理想的発話状況はどのように実現されるか？

B：基本4つはこのゼミでは現状満たされているのではないか？発話者の誠実性をどう捉えるかが曖昧なのではないか。行動由来か、それとも話している内容由来なのか？

C:無制限の参加機会→いつでも話せることを定義、疑問・意見を表明できる機会がある
平等な発話機会→すでに達成済
誠実性の想定→授業ないによほど的外れなことを言わない
コミュニケーション統御のための様々な発話納涼の必要性→日本語が十分使えている時点で達成済？

A：基本4つは達成済み
対話・発話の姿勢
正誤は別として「聞いてあげる環境」を整える必要性

D:コミュニケーション統御する様々な発話能力のいつ要請
　前提知識・ファシリテーターの重要性
　「わかりやすく伝える必要性」

森先生コメント：
・真理＝Truth
True と Real は何が違う？
科学てき発見は事実（Fact)と結びつく→True な Fact の発見が使命だが我々の世界は True な Fact のみで形成されているか？
Reality って何？
テレビ・専門家会議に何を求めているのか？どちらを求めているのか？ この区別が曖昧になってしまっているのではないか？

・反証可能性について
　検証可能性
真理の証明はどの段階で？一回の実験は事実なのか？1000 回やって一回失敗したら？徹底的な反証に答える必要性？

　ex)懐かしの STAP 細胞
↓
（実験によって反証に答える限り）真理は証明される
　背景にあったメディアによる急速な拡散は？
　権威に裏付けられた不動の結果ではなく、反証によって裏付けられた継続的なプロセスによって成り立つ科学

・学術会議における菅首相
説明責任からの逃避＝社会的議論からの逸脱

そもそも学術会議の権威主義はどう捉えるべきなのか？　各国に存在する「アカデミア」と日本の特殊性

　　学術団体が金を出すか、政府が金を出すか

「国防のためのコロナ対策」となると学術団体は反対する可能性大

（軍事研究への懸念）防衛省は関わるべきなのか

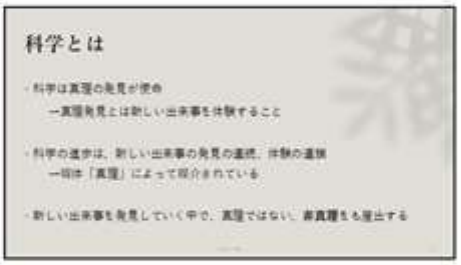
→日本の科学分野において理想的発話状況の実現は程遠い状況にあるのではないか？

True＜Real　な嗜好状況にあるのではないかという懸念

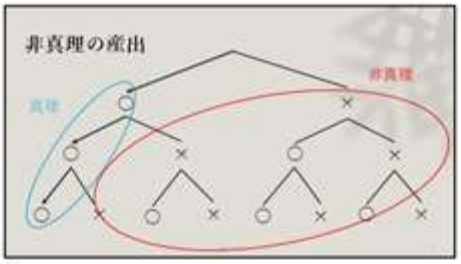
〈資料〉

2021/7/27

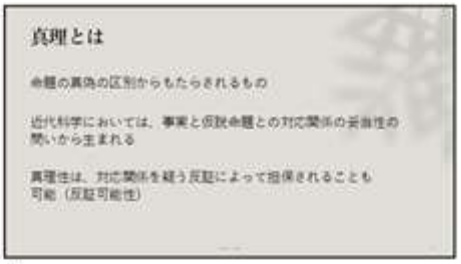
1



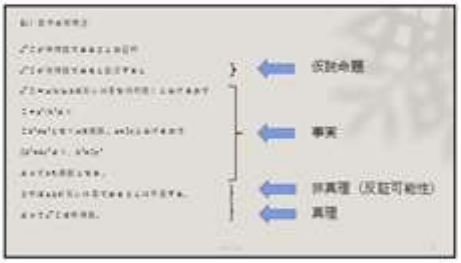

2




3



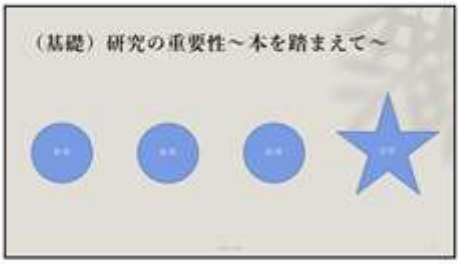

4




5

6

1


（基礎）研究の重要性～本を踏まえて～

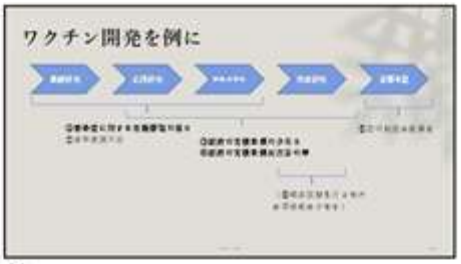
7

（基礎）研究の重要性～社会背景から～
将来において、何が評価されるかわからない時代
種となる基礎研究の重要性

8

日本における研究の現状
相対的な衰退傾向（他国比較）

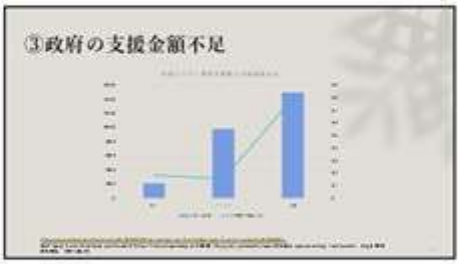
9


ワクチン開発を例に

10

①感染症に対する危機意識の低さ
アメリカ
日本

11


③政府の支援金額不足

12

## ④政府の支援金拠出方法問題

| アメリカ | 日本 |
| --- | --- |
| ・ワクチン承認後を見据えて企業に支払い・主導も含めて支援 | ・段階別の補助金拠出の逆次投入型でワクチン購入の確約もなし<br>・1回のみは効果もないと言う方との意見も中々ない |

13

## 日本学術会議と内閣府

・日本学術会議の任命拒否問題
- 中曽の「学人分離」との関連性の指摘（今年何回目の反発）
- この責任は一旦置いておいても、現状として政府への研究者方が増えている中で学
- 「学人分離」の動力を使いしまうのはなぜか？「学人分離」とは何か？という話から始
- 「世界トップの科学力の推進を目指して、将来から活躍な人材を集める中曽氏の「学会員などの人材育成プロジェクト」であり、2008年から実施

※日本の人材育成プログラムは存在する

14

## ディスカッションに入る前に

真理とは、ある言明が理想的な発話状況にある討議において、正当化されるハーバマスの規定する、理想的な発話状況においては以下の4条件が統一立つ必要ある
- 無制限の参加機会
- 平等の発話機会
- 発話者の誠実性の保証
- コミュニケーション状況する様々な発話能力の必要性

15

## ディスカッショントピック

・理想的発話状況を実現するためには
　　具体的にどのような行動を取るべきか？

・森ゼミの場合で考えよう！

16

## 参考文献




17

| | |
|---|---|
| 「恋愛」とは何か？ | A 班 |

## 〈報告〉

媒体「愛」

愛することの方向性
媒体「言語」を媒体する関係類ひ
生殖のために言語を必要とする唯一の生物

自らの愛を表現し、その表現を相手が感じ、その体験を自らが確証するという体験と行為の非相称の連鎖の関係になる
→恋い焦がれ、不安定性のサポート愛：行為→体験　体験→行為
権力；行為→行為
（愛の想いを表現　体験行為表現を感じる　行為体験験
体験を自らが確証する　体験）

不安定さを支えるものは何なのか？
性的快感・贈り物→行為で代替する行為
文化的制度的関係→婚姻制度・血縁関係による親族関係、法による補強

「愛」は一対一の関係でしか成り立たないのか？

直接世界的関係→同時的世界的関係拡張された
「汝の隣人を愛せよ」
愛は同時世界的な広がりへも拡張することが可能

ディスカッションテーマ

「愛」と「恋」に違いがあるか？どのような違いがあるのか？

愛＝love, affection　恋＝love

愛人と恋人の違いとは？
家族愛とはいうけれど、家族恋

グループ B：能動的な「愛する」行為の一つが「恋愛』
受動的な恋はない

グループ D：愛は真心、恋は下心の崩壊を前提に考える
愛＝関係性が深い、ドロドロ?　あ、そうなん？
恋＝浅くて狭い

グループ A：恋は遠く、愛は親密
なんで人がつくだけでこんなにイメージかわるのか？　不倫＝愛人のイメージ？

グループ C：ステップの違い？
対モノ・ヒト＝愛
対ヒトのみ＝恋←愛の前段階？

森先生コメント：
「恋愛」＝明治の言葉 by　北村透谷愛も恋も肉体ありき
プラトニックラブ　cf.　草の花ストーカー行為
マッチングアプリで恋は表現できるのか？

〈資料〉

2021/7/27

恋愛とは何か？

A班

1

媒体「愛」の特徴

①「愛する」という方向性が、媒体「言語」を媒介する関係を規比させる。

②自らの愛の想い（体験）を表現（行為）し、その表現（行為）を相手が感じ（体験）、その体験を、自らが確証（体験）するという、体験と行為の非相称の連鎖の関係になっている。

➡非相称ゆえに、愛に陥ってしまうと空無がれることになる
➡壊れやすく不安定→何かにより支えられる場合がある

2

愛と権力の関係の違い

【愛】　行為→体験 体験→行為

【権力】行為→行為

行為は、出来事の帰属点を人に求め、
体験は、その出来事を世界そのものに帰属するものとした。

3

愛の不安定さを支えるためには？

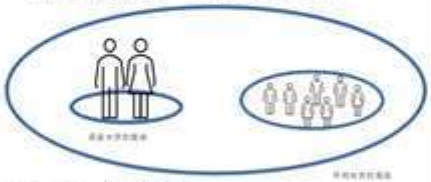
●性的快感や贈り物➡愛→愛の不安定さを行為で代替することは再び不安定さを招く原因ともなる

●文化的制度的関係・・・婚姻と、それによる姻族と血族とからなる親族関係、比較的小さな集団を「家族」とする文化、法により補強する制度

「愛」は一対一の関係でしか成り立たないのか？

4

直接世界的関係→同時世界的関係



5

Discussion theme

「愛」と「恋」に違いはあるか？
違うとしたら、どのような区別？

6

1

英語では？

愛　love, affection

恋　love

7

愛人

愛人（あいじん）とは、

・（現代日本語）主に異性間において、深い性愛関係にある相手を指す。

・（古来の日本語）恋人。あるいは人を愛すること。

（Wikipediaより）

8

9

| | |
|---|---|
| 「芸術」とは何か？ | C 班 |

## 〈報告〉

【概要】
芸術：表現者あるいは表現物と、鑑賞者が相互に作用し合うことなどで、精神的・感覚的な変動を得ようとする活動。
芸術は送り手と受け手によって解釈の違いが生じる。
芸術の分類
・文芸（言語芸術）
・美術（造形芸術）

【ディスカッションテーマ】
この絵画の「歪んだ時計」は何を表わしているでしょうか？

【質疑応答】
A 班：
時計・時間に支配されていることを表していると思った。

B 班：
時計は記憶の中の曖昧なことを示しているのではないのか。
また絵について絵単体で考えるか、タイトルから考えるかの2通りアプローチがあると思った。

D 班：
時計は時間を表していて、時の歪みであると考えた。
また、これは夢の中と言われたことがある。

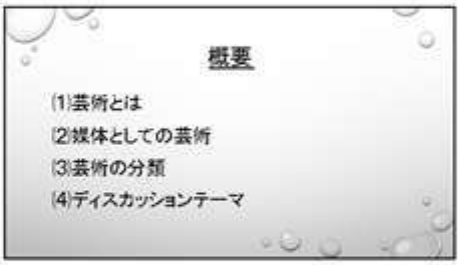
C 班：
ダリはカマンベールが溶けていることを表現しているらしい。
また、他にも面白い諸説が存在する。

森先生：
記憶がどう言う構造になっているのか考えると良い。
時というのは、常に歪んでいるのではないだろうか。
私は、時は常に歪んでいると思う。

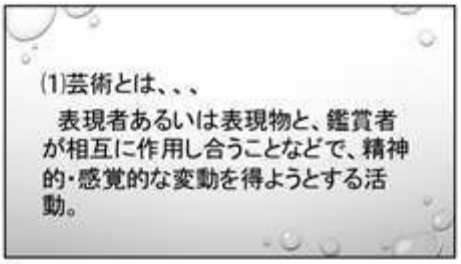
〈資料〉

2021/7/27

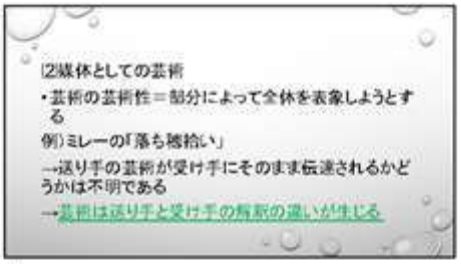
1




2




3




4

5

6

1

| | |
|---|---|
| 「都市」とは何か？ | D 班 |

## 〈報告〉

**◯都市と集落の違い**

・都市　物理的側面と生活的側面が連接/シンボル性の要請

・集落　設計されたのではない/シンボル性を必要としない

**◯建築という媒体**

建築する（行為）は媒体「光」に形式を与え、知覚すること（体験）で建物の内外に秩序を生み出す

**◯他媒体と建築**

建築するということは、空間を区切るだけでなく、時間をも考慮する等

例）大聖堂の鐘の音

**◯都市とは**

社会体系だけでなく、媒体としても機能するのが都市

**◯媒体都市の形式**

商工業のために集中した「見知らぬ人たち」と、親密な「知人」が区別されるのが媒体「都市」の特質

**◯都市におけるコミュニティ**

・ゲマインシャフト：共同体　（地位血縁や人間関係で成立）

・ゲゼルシャフト：社会　（目的を持って契約で成立する）

例）満員電車とコミュニティ

→現代のコミュニティはゲマインシャフトとはなりえない

**◯近代以降の結果**

「愛と血による結びつきの終焉」

＝「公共性」の始まり

**◯「遊歩の弁証法」**

「遊歩」とは？

→目的を持たずに街路を彷徨う人物像のこと

**◯現代における「不安定性」（見栄と孤独）**

見栄により仮確定させる　例）学歴

**【ディスカッション】**

都市で暮らす我々は、所属するコミュニティとゲマインシャフト的な関係を築く努力をすべきか？

メリット：留守番、子守などを任せられる

デメリット：人間関係の悪化

A 班

災害時は、メリットはあるが、日常ではデメリットの方が多いのではないか

B 班
A 班とほぼ同じ意見
また、コミュニティがどこにいるのかにもよるのではないか

C 班
そもそも築きにくい環境 （大型スーパー ホテル）
プライバシーの問題

C 班
関係性によって変わる
大学生にとってはメリットがあるのか？
隣の人がぐいぐいくると怖い→デメリットの方が大きい

森先生
・ゲマインシャフトとコミュニティ
・ゲゼルシャフトとアソシエーションは違う
→アソシエーション意思を持って集まる 例）サークル
・人の集まり方/言葉の意味→各国で考え方が変わってくる

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

1

## 都市におけるコミュニティ

見知らぬ人同士が居住していくためにコミュニティの形成が重要され設計される

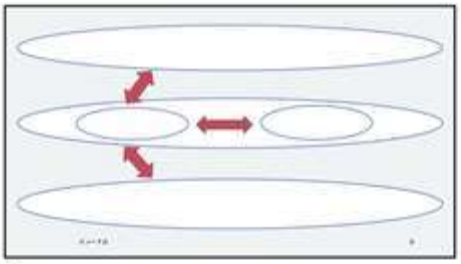
ゲマインシャフト…地縁血縁や人間関係で形成する、共同体。

ゲゼルシャフト…目的をもって契約で形成する、社会。

ゲゼルシャフト化した現代で作られるコミュニティの定義は？

7

8



9

## 近代以降の結果

様々なツールや技術によって
間接世界が無限のように広がった
直接世界と間接世界の明確な区分けがしにくくなった

- 「愛と血による結びつきの純画」
- 「公共性」の始まり

10

このように、間接世界と直接世界（疑似的なものを含む）とが無限に広がる世界
－「都市」

Q．では理味ともいえる「都市」をいかにして認識するか？

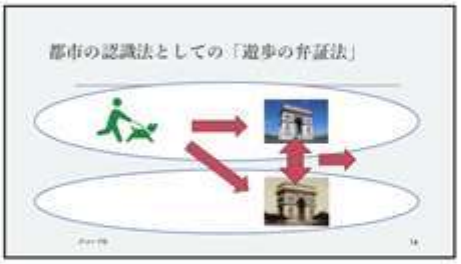
11

## 都市の認識法としての「遊歩の弁証法」を扱う前に。。。

12

「遊歩」とは？
ベンヤミンが「19世紀の首都・パリ」に見出したもの
目的を持たずに街路を彷徨う人物像のこと
19世紀初頭にパリの街に登場した有閑なブルジョワ階級の男性

13


都市の認識法としての「遊歩の弁証法」

14

このような「都市」の観察法
↳世界が無限に広がるために起こる
Q．ではミクロな視点で見たとき，我々はいかにして
「我々」を定義するか？

15

現代における「不安定性」（見栄と孤独）
無限に広がる閉鎖世界と直接世界（疑似直接世界）
↳自身の位置と地平を確定できない（＝自身のアイデンティティを確立できない）
↳何にでも確定させたい
見栄により仮確定させる
例）学歴・職業等

16

ディスカッショントピック
都市で暮らす我々は，所属するコミュニティ（マンションの住民やご近所さん等）とアソシエーション的な関係を築く努力をすべきか？
メリット：留守番，子守などを任せられる
デメリット：人間関係の悪化によるトラブル

17

| 「社会」とは何か？ | B 班 |
|---|---|

## 〈報告〉

- 社会の認識法
  - 〇 「私」が「社会」として認識したものは社会である
    - ■ しかし、部分的なモノでしかない
- 「社会」という観念は圧縮され、誇張される
- 「社会」の観察に関する無前提性
  - 〇 社会の観察は観察者によってなされるが、往々にして観察者自身は区別の対象にはならず、前提的に受け入れられる（前提の留保）
- 専門家と凡人による社会の認識法の違いが存在する
  - 〇 凡人の社会の認識法
    - ■ 自らの立つ今ここを今ここから観察
      - ● 時間と身体の拡張世界

- 方法論的個人主義と方法論的集団主義

グループ D
良くも悪くもない
┗代議士の汚職やシルバー民主主義的傾向を考えると良くはない。
┗しかし一方で他に方法があるか？というとない。
問題は民主主義の前提が成り立っていないこと
┗前提として参加者一人一人が自律し、主体的な意見を持っている
┗その環境はない

グループ C
制度は良いが実情は良くない
一人一人の意見が集まり、政治家が選ばれるという点は良いが、高齢者に合わせた政策ばかり取られて若者の意見が反映されないなど

グループ A
制度としては良い。実情としては良くない
┗1 人 1 人の意見を拾い上げる環境が存在する。
┗シルバー民主主義的傾向などから、全員の意見を採用できているか？という点では微妙

グループ B
社会に存在する個人が全員意見を持っていたら良い環境である。
意見の強さを投票の際に反映できるものもあり、それならば方法論的個人主義と言えるのではないか

森先生
・選ぶ相手は自由に選ぶことができない、選挙という形式が構造化してしまっている
 ┗例えば山口県の選挙区の安倍さんとか
 ┗封建制と変わりない
・節目以外の年の投票しかしない形もあり？

投票者の真面目度が上がるかも？
・土地との関係を切り離す？
 ┗山口の例

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

1

## 凡人としての私たち

私たちは自らのヨツやここを、自らのヨツやここで観察

○「ヤここ」とは
等質的時間空間と身体の運用的出現が基礎の世界
（測定可能）　（観察可能・計測可能）

7

## 社会の3つの水準

①身体性の時空水準
②社会的世界の分節化した時空水準
③想像の世界の時空水準
○これらは経験性（無限性）と空時間性）
基軸としては「私」と自己主張と自己分析）

これらの考え方が「多元的現実論」

8

## 社会の様相(教科書)

同時世界

先行世界

分節化
（自己と他者の相互作用）

後続世界

直接世界

9

## 現代の社会

『想像』の様『科学』の"設定された意味領域"
これらが
現代の通信・映像技術の進化によって
領域が明確でなくなる

○バスホ
典型的なエレメント、物質形態が
サイバー空間上にリアルに存在する

10

## B班の考える社会

社会とは社会だと思ったものが社会！
個体ごとに区別している

○社会秩序で構成された社会
法秩序で構成された社会

11

## 方法論的個人主義とは

社会の分析の単位を主として「個人」に求めるアプローチで、個人の心理・行為、個人間の相互行為などから社会が成立していると考える。

対して

社会を、多かれ少なかれ実在的なものとみなし、個人の心理や行為に究極的には還元できないと考え、その分析の単位を「集合」に求めるアプローチを
方法論的集合主義

12

ディスカッションテーマ
日本的な民主主義は良いものであるか
そもそも「日本的な民主主義」とはどのようなものか
私達が社会という言葉を使うとき、それは方法論的個人主義である
私たちが社会の一員であると考えるとき、それは方法論的集合主義である。

13

| | |
|---|---|
| 「日常性」とは何か？ | C 班 |

## 〈報告〉

ディスカッションテーマ
①コロナ禍にある現在は日常なのか、非日常なのか
②何をもってコロナの終結と見るか？
③コロナ終結後の日常とはどのようなものであるか？

グループ D
①非日常だが、慣れで日常化しつつある
②風邪と同じレベル
③接触に敏感

グループ C
①昨年は非日常だったけど、今年は日常化している
②かかっても危機感なし
③昔とは異なるオンラインの活用など、＋の面も残る
でもヒトとの接触は敏感になるかも

グループ A
①時間的な慣れによる慣れが出始めており、日常に近づいていっている
②わからない
┗インフルと同じようなレベル感
┗ワクチンの接種率
③分からない

グループ B
①日常である
日常＝慣れとして定義する
②世界単位で考えると、日本でワクチンが普及しようがそれは終結ではない
WHO は終結の宣言はしないだろう
→責任問題があるので言えない
③コロナ前とは違う日常になる
コロナ禍で出てきた使える部分は使っていくだろう

カリスマの日常化
┗カリスマ的支配が永続化することに伴い、他の支配類型に近接していく
┗カリスマ性の下で被支配者に対峙することが当たり前の常態になっていく
┗でも外側から見たら常に非日常？

- 本当の社会は定義できない
- 区別をする主体の信憑性も問わねばならない

→本当の社会は個々人の考えに帰属するものであって、一般化することはできない

森先生より

- 「日常性」は”take for granted”,”everyday life”
    - ○ 超自然的な力が働いている→コロナの場合もそう
    - ○ カリスマの日常化と同じくコロナも日常化

〈資料〉

2021/7/27

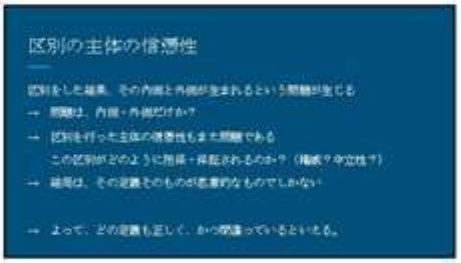
1

2

3

4

5



6

1

ディスカッションテーマの帰結
結論　本当の社会というのは、個々人の考えに帰属するものであって、一般化することはできない。個々人それぞれに自分の思う社会、自身があるのであって、これは間違いでなければ、正しくもない。

7

| | |
|---|---|
| 「音楽」を論じる（１） | A 班 |

## 〈報告〉

コロナと音楽のあり方
・オンデマンドとオンライン
オンデマンド：クライアントからの要求に応じて、データを送ったサービスを提供
オンライン：通信回線を介してデータベースに接続、リアルタイム
・例：M ステ　LIVE であることの重要性
・媒体を通しての音楽
・オンラインライブは代わりになっているのか
・バーチャルライブ

ディスカッションテーマ
音楽のこれからのあり方
・オンラインライブやバーチャルライブは主流となっていくのか
・新しい音楽のあり方が生まれるのか

C 班：主流にはならないがオンラインライブによって選択肢が広がる
D 班：主流にはならないが、技術の発展によって肩を並べるくらいにはなるのではないか
　　今のオンラインライブやバーチャルライブが新しい音楽のあり方なのでは
B班：一つの選択肢として残るのでは
　　開催する側にも集金のメリット
A班：今後も対面と並行して残るのでは

森先生：本当に選択肢として残るのか？主要な部分は元に戻るのでは？

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

1

| | |
|---|---|
| 「音楽」を論じる（２） | B 班 |

## 〈報告〉

音とは何か
・私たちが思う音楽
→楽譜にリズムやメロディがある
音に一定の規則性や秩序がある
・これは音楽？　セミの鳴き声、プリンターの印刷音、ししおどし
・サウンドスケープ：音の風景
本来音と風景は切り離せないもの
・ジョン・ケージ
4”33　4 分 33 秒間何もしないという曲
コンサートホール内に響く音に耳を傾けてほしい
・ろう者にとっての音楽
音の視覚化、音の言語化 『LISTEN リッスン』

ディスカッションテーマ
・皆さんは音楽をどう楽しんでいますか？
・色々な音の楽しみ方を教えてください

C 班：音楽によって自分の感情をコントロール
D 班：様々な楽しみ方がある
　　LISTEN は音楽とは言えないのではないか。
　　そもそも音という概念を知らないと捉え方が違ってくるのではないか。
　　「幻想交響曲」がおすすめ
B班：音楽は意図的に作るからこそ音楽であるという意見
　　聴覚→視覚は耳が聞こえる人にも起こるのでは
A班：MV など映像とともに楽しむようになってきた

森先生：近代音楽の成立

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

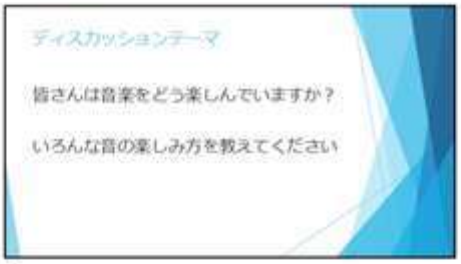
1

ろう者にとっての音楽

7

無音の58分間

8


ディスカッションテーマ
皆さんは音楽をどう楽しんでいますか？
いろんな音の楽しみ方を教えてください

9

| | |
|---|---|
| 「労働」を組織化する | D 班 |

## 〈報告〉

労働とは具体的に？
人間にとって労働はどういう存在であるのか
→社会に対して影響を与えるため？自己実現のため？

労働の本質とは？
→人間が自身の行為により自然との関係を媒介することで価値を生み出すプロセス
人間は自然界から生存に必要な生活の諸手段を獲得している(マルクス)

人間以外の主体による行動は労働といえるのか能動的に自然界に働きかけるもの
自然界と人間界の相互作用であり、人間それ自体も変化していった労働が自然とある意味で離れていった

・原始共産制から階級世界へ
→生産手段を支配階級が所有、被支配階級が労働
　　他者の意志に従属して強制的に行われる。労働＝苦痛
・資本主義の下における労働
→労働疎外。労働力が一種の商品となった
・産業革命による労働の変化
→機械製大工業の確立 労働の細分化の個々の労働が全体の労働の一構成要素になった

労働をどのように定義するか←自然との関係だと…
ハーバマス　労働＝道具的行為
労働＝人間から自然へ働きかけること＝媒体「身体」とその道具的延長
・農業における例
自給自足＝道具を用い行為だけで生活
トマトを売るために分業＝1 つ 1 つの労働に社会性が生まれる
・工場の例
目標の達成のために労働を組織化 人々の相互の行為の制御が必要(私語を禁止) このとき人間は商品化している 商品化された人間による労働の集積

●ディスカッションテーマ『AI は労働すると言えるのか？』

AI とは人間の知的行為を代替するもの
特化型：限定された領域の課題に特化して自動的に学習、処理する汎用型：人間と同じようなもの
第 3 次 AI ブーム ディープラーニング(深層学習)により活発化
シンギュラリティ(技術的特異点)　人工知能が人間よりも賢くなる
2045 年問題 労働人口の 49%が AI やロボットに代わると言われている

〈ディスカッション内容〉
・グループ A
　AI をどのように見るかどうかで変化
　人間の意志の有無、自発的感情の欠損、物事の解決ができない

・グループ B
　労働していると言える
　AI は人間にとっての身体を用いての労働をする 人間の仕事を分担・拡張している
　道具的延長、ドラえもんがママの買い物をするような感じ？

・グループ C
　AI の労働 何かしらの報酬がある→求めていないから労働とは違う
　お掃除ロボットについては労働の商品化であるのではないか
　清掃の人がやっていることをロボットが代替(例：ルンバ)

・グループ D
　いずれ労働に置き換わる可能性がある
　労働の定義は時代によって変化しているため、再定義されるのではないか

・森先生
　北朝鮮、労働党、中国語に労働存在しない(労りのニュアンス)
　ドイツ語の arubaite の日本語訳、英語 labor
　人間の意識が関与 自身にとって意味のあるものか、金がもらえれば良い？
　主観性そもそも存在する？　Amazon のあなたへのおすすめ(AI による)
　本来はコンシェルジュの仕事だったが、置き換わっている
　Wired brain 個体として持っているはずの脳が AI と結びついている
　AI による AI の創造 戦争の変化も

Q オンライン上だけの話なのか(前田さん)、
以前にもあったのがオンラインになって顕在化
A 消費社会になり広告がでる＝主観性の不透明化
アナログの労働、デジタル庁無能、そもそもオフィスがデジタルではない(笑)
知識の選択は AI が行う 教授も AI になる
大学清掃業者に年間 1 億円の支払いをしている

〈資料〉

2021/7/27

1

2

3

4

5

6

1

なぜ？

自然界を受動的に受け入れるのではなく、能動的に自然界に働きかける
NOT主観
「自然界と人間の相互作用によって人間それ自体も変化させてきた」

- 「人間それ自体も変化」
  - 労働が自然とある意味で離れていった

7

労働のこれまで
～原始共産制から階級社会～

- 生産手段を支配階級が所有し、労働は被支配階級によって行われる
  - 労働＝Not 自己の意志に基づくもの
    But 他者の意志に従属して強制的に行われる
  - 「労働＝苦痛」のイメージ
  - →「労働非外」「疎外された労働」

8

労働のこれまで
資本主義の下における労働

- 資本主義においても一種の「労働非外」が起きた

- 人間の労働力が一種の「商品」として扱われた
- 労働者は賃金と交換に資本家に労働力を提供
  - 賃労働
  - 労働者の生み出した剰余価値によって資本家はより大きな労働を生み出す
  - 労働非外の資本主義的形態

9

労働のこれまで
産業革命による労働の変化

- 産業革命→機械制大工業が確立
  - 少数の大資本のもとへ資本が集中
  - 資本の指揮・監督下で分業に基づく協業の形態に組織化
  - 労働の細分化
  - 個々の労働が全体の労働の一構成要素として編成

10

では労働をどう定義すればいい？

11

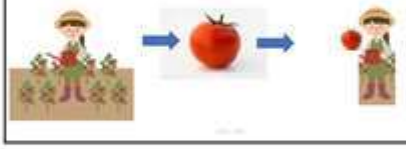
労働と社会性

ハーバマス「労働＝道具的行為」

労働＝人間から自然へ働きかけること＝身体「身体」とその道具的延長

12

自給自足＝道具を用いた行為だけで
生活している



13

「トマトを売る」ために分業＝一つ一つの労働に社会性
が生まれる

14

15

目標の達成のためには人々の相互行為の
制御が必要

このとき人間は商品化している

16

これまでの社会…目的達成のため，商品化された人間に
よる労働が集積している

では技術が発展した現代，そしてこれからはこの構図
はどう変わっていくのか？

17

ディスカッションテーマ

AIは労働すると言えるのか？

18

## 労働のこれから

- 人以外の台頭
  - →AIの台頭
- AI (artificial intelligence、人工知能)とは
  コンピューター、医療・金融・社会・教育など、人間の知的領域を代行できるように世界中に広まれたコンピューターシステム

19

## 現状

- AIの種類
  特化型 … 限定された領域の課題に特化して自動的に学習、処理を行う
  汎用型 … 人間と同じように様々な課題を処理可能
- 第三次AIブーム
  ディープラーニング(深層学習)による技術革新
  →画像認識や音声認識、自然言語処理、予測などの技術が飛躍的に向上

20

## 今後のAI

- シンギュラリティ(技術的特異点)
  →人工知能などの技術が、人々の人間より賢い知能を生み出すことが可能になる時点を指す
- 2045年問題
- 現在、日本人口の49%が持っている知識がAIやロボットに変わる！？

21

ディスカッションテーマ

## AIは労働すると言えるのか？

22

| | |
|---|---|
| 「民主主義」とは何か？ | A 班 |

## 〈報告〉

民主主義：国民から選出された議員や、政府が主権を持ち行使する政治体制
民主政治：民主主義に基づいて行われる政治
その指導原理は主権在民、普通選挙、基本的人権
日本の現状 議員内閣制　政治体系の観察が出来ていない(投票率が低い)
政治に関心を持つ若者が少ない

●ディスカッションテーマ　『国政投票を義務化するべきか
義務化に以外に何か良い策があるだろうか』メリット：国民の主権者意識の改革(政治に関心を持ちやすくなる？)
デメリット：麻生さん「政治に関心がない＝関心がなくても生きていけるくらい平和な国」
必要なコスト(システム準備、罰則)がかかる

〈ディスカッション内容〉
・グループ A
義務化することで今まで投票しなかった人の民意が汲める
政治家の意識改善にもなる
メリットを増やせばいい

・グループ B
義務化すれば投票率は上がるが、意志のない票が増える
関心のある人だけで良い、年齢差のギャップを埋める 高齢者の有権者数を減らす？

・グループ C
投票しないのはなぜか→投票しても変わらない 政治との距離感がある
罰則ではなく、特典(アメ＞鞭)の方が投票率は上がりそう
義務化自体が無理あるのではないか

・グループ D

義務化の必要性ない

メリットデメリットを上回るかが不明

手段の目的化、無知な人の票が投じられる

義務化ではなく教育による投票のすすめ、主権者意識の醸成が必要

・森先生

東京都議選どうなる？自民党が立候補大量排出(勝つ自信の表れ)

結局どっちになっても状況が変わらないから投票率下がる(前田さん)

衆議院選挙はオリンピックの成否に掛かっている

結局政治家は血筋、民主主義は関係ない、家柄を競っている

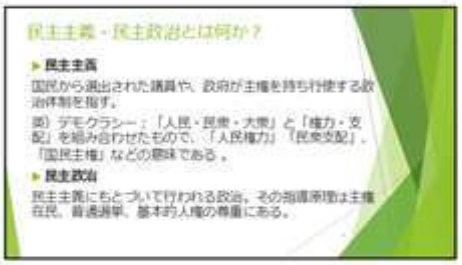
秋学期は日本の政治を扱う予定

山口 3 区に注目

〈資料〉

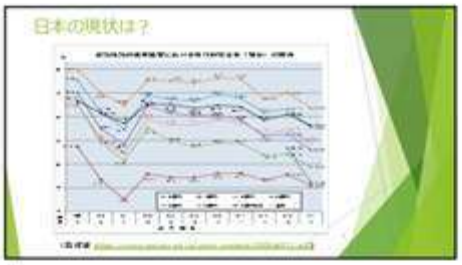
2021/7/27

1




2

3




4

5

6

1

7

**ゼミ合宿代替授業発表**

A 班発表

**テーマ:失敗の本質から考える日本のコロナ対応**

都議選の行方は……自民党が有利、支持率約 18%は最も高い 次点で都ファ
戦略面/組織面での失敗
●短期決戦の戦略思考(p277,278)
・日米開戦後の確たる長期展望のないまま戦争に突入
→アベノマスク 約 260 億円、配布終了まで 2 ヶ月かかった/緊急事態宣言の発令 宣言中は減少しているが、解除後すぐに感染者数は増加している リバウンドしている
●主観的で「帰納的」な戦略策定(p.285)
・現実から出発し状況ごとに時には場当たり的に対応し、それらの結果を積み上げていく思考方法が得意であった
→選手団のバブル方式では一般市民との隔離が不十分だった/電車の減便要請

ディスカッションテーマ 1「五輪直前ということを踏まえて、どのような方向性でいくべきか？」例)人流を減らすタイプの対策、感染対策を厳しくするタイプの対策
短期的なプランですらうまくいっていない→情報を多く得ることができる

前田さん→五輪を長期的なものとして捉えるか、短期的なものとして捉えられるか
日本軍が得意であったのは短期戦、五輪を短期と捉えるのなら
B 廣間さん→対策を前もって立てる/前もって決めた方針がうまくいかなかった時のプラン BC を考える
C 村岡さん→目的達成のための小枝(短期)、大元(長期)/コロナ or オリンピック？
コロナを抑えつつのオリンピックを行う
A 金澤さん→目的が明確ではない。感染対策を厳しくする。観客数の制限など

D 鈴木さん→今はオリンピックの方が優先。世論の対策を優先する。

●組織学習(p326,327,332)
日本軍のやり方はシングル・ループ学習(感染者減/解除/感染者増加/発令) ダブル・ループ学習に変化させる必要がある。(宣言を出さないために何ができるか)

「シングル・ループ学習」
→感染者が減れば解除、増えれば宣言の繰り返し
「ダブル・ループ学習」
→宣言のこれ以上の発出を防ぐためにはどうするか、まん防など

現場の状況をよく知る者の意見が取り入れられない。
●組織特性(p.356,332)
米軍のように一元的な統合組織を持たなかった。
陸海空を日本政府、東京都、日本医師会に置き換えても成立するのではないか。
現在の行政の長は総理大臣だが、機能を果たしているのか

ディスカッションテーマ 2「リーダーに求めるものは？統合する存在として今の菅総理に足りないものとは？また、菅さん以外に、リーダーとしてより適任と思う政治家はいるか？」

前田さん→現職の政治家じゃないとだめか
日本分科会は政府のものと考えるか
藤澤さん→平常時と緊急時のリーダーでは求められる素質が違うのではないか

金澤さん→定義についても話し合ったうえで議論をしてほしい

B 鈴木さん→なぜそれをやるのかの理由説明が必要/世論の声を聞きすぎないことが必要/各官庁に顔がきく人
C 戸島さん→カリスマ的存在/場当たり的な対応ではなく、大きな目的のために一直線に進む人

A 西原さん→信頼したい、ついていきたいと思える人/人望が厚い人
河野太郎さんははっきりと物事を言うからリーダーに向いているのではないか。

D 藤澤さん→説得力のある人 論理情熱人柄 by アリストテレス/吉村さんは適任？

前田さん→精神論的なものを求めているのではないか。
はっきりした物言いの例としてトランプのような人が挙げられる。

森先生→日本において求められるのはネゴシエーター 河野大臣は難しい/小泉純一郎さんは国民の支持があった 大統領制に合うような政治家はいない/経団連の元会長は病気だっ

たが 2 年務めた 70 歳以上の人が会長をやるのはおかしい 20 年以上先の見通しができない/年功序列が残っている限り戦略思考などが生まれない/時間感覚を見た時に、日本人は後ろを見てアメリカ人は前を、将来を見る/今から何かをしようとしている人は危機感を持たれるし潰される/河野さんが強いのはお金があるから。選挙民のことをあまり考えなくてもいい。河野一郎と河野洋平についても調べてみて。

# 『失敗の本質』から考える日本のコロナ対応

1

## 注目した『失敗の本質』のテーマ

- 短期決戦の戦略志向（p277）
- 主観的で「帰納的」な戦略策定（p282）
- あいまいな戦略目的（p268）
- 組織学習（p325,p367）
- 組織特性（p252）

2

## 短期決戦の戦略志向

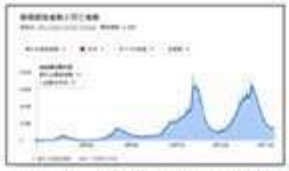
日本は日米開戦後の確たる長期展望のないままに、戦争に突入したのである。（p277）

日本には米国という大国を相手に長期戦を戦い抜く力はない、なんとしても戦争は短期戦で終わらせなければいけないと考えていた。（p278）

3

## 短期決戦の戦略志向

【図1】



2回目、3回目とも宣言中に感染者数は大きく減少しているが、2回目宣言解除後すぐに波が来て感染者数はすぐに増加している。

4

## 具体例

<u>アベノマスク</u>

厚生労働省によると、全戸配布にかかった費用は総額約２６０億円。日本郵便のシステムを活用して約１億２０００万枚を配り終えたのは、開始から２カ月後の昨年６月２０日ごろ。既にマスク不足はある程度解消した時期だった。

→短期志向の象徴

5

## 主観的で「帰納的」な戦略策定

「日本軍は、現実から出発し状況ごとに時には場当たり的に対応し、それらの結果を積み上げていく思考方法が得意であった。」（p285）

選手団の「バブル方式」→十分な検討がなされず、場当たり的な対応で一般市民との隔離が不十分だった。

6

## あいまいな戦略目的

「いかなる軍事上の作戦においても、そこには明確な戦略ないし作戦目的が存在しなければならない。目的のあいまいな作戦は、必ず失敗する。それは軍隊という大規模組織を明確な方向性を欠いたまま指揮し、行動させることになるからである。」（p 268）

7

## ディスカッション1

五輪直前ということを踏まえて、
どのような方向性でいくべきか？

例）「人流を減らすタイプの対策」
「感染対策を厳しくするタイプの対策」等

8

## 組織学習

「失敗した戦法、戦術、戦略を分析し、その改善策を探求し、それを組織の他の部分へも伝播していくということが実行されなかった。」（p326）

「現場の状況をよく知る者の意見が取り入れられなかった。」（p327）

9

## シングル・ループ学習

「日本軍の組織学習は、目標と問題構造を所与ないし一定したうえで、最適解を選び出すという学習プロセス、つまり『シングル・ループ学習』であった。」（p332）

→感染者↘解除、感染者↗発令

10

## ダブル・ループ学習

「必要に応じて、目標や問題の基本構造そのものをも再定義し変革しなければならない。」（p332）
コロナの例で言うと、
これ以上宣言を発令しないで済むようにするためにはどうすればいいだろう？」
と考える状態に変化していく必要があると考えた

11

## 組織特性

「日本軍は、米軍のように、陸・海・空の機能を一元的に管理する最高軍事組織としての統合参謀本部を持たなかった。」（p356）

（当時の場合、天皇が裁定を下すが、天皇は個々の問題に対して、自ら進んで指揮、調整権を行使することはなかった。（p322））

12

## 組織特性

「陸・海・空」を「日本政府・東京都・日本医師会」に置き換えても成立するのでは？

→現在において、その統合の役割を果たすのは行政の長である総理大臣だが、有効に機能しているだろうか？

13

## ディスカッション2

リーダーに求めるものは？
統合する存在として、
今の菅総理に足りないものとは？
また、菅さん以外に、リーダーとして
より適任と思う政治家はいるか？

14

B 班発表

**テーマ:「失敗の本質」から今後の日本を考える**

1.「戦略策定」の失敗

緊急事態宣言の繰り返しに意味はあったのか。

→総合的に判断

1 回目 世界的な評価を得た→本当に実績と言える？経済的な面ばかり取り上げられる

2 回目 ステージ制の導入 飲食店を中心にした政策

→ 中途半端な成功が今もなお宣言策定の部分にも影響

・再宣言の判断基準を定めるには、データが乏しく明確ではなかった（数値データの軽視）

・ステージ制に関しても、初めは基準が明確ではなかった

・会見内容からは建設的な議論の有無を感じない

・主観的判断に基づく

2. 前例がないと言う前例を作れ

○医療崩壊というワード

宣言中以外:減る→忘却

医療崩壊というワードを自粛のお願い、正当化のダシにしているのではないか？

○論点ずらしの正論

プラン B を考える前にプラン A を完璧にする

→プラン B を考えられない

【ディスカッションテーマ1】

**政治側には政策が失敗した時、その現実を認め、受け入れるために何が必要か**

**市民側には政策が失敗した時、その現実を認め、受け入れるために何が必要か**

A 班 金澤:（政治）データの開示が必要

（市民）そもそも受け入れなければならないのか？

ある程度の意見を出す しかしやりすぎない バランスを大切に

D 班 小島:(政治)誠実性:過度に地位にしがみつかない
(市民)誠実性:失敗を評価する 批判の礼儀
(メディア)誠実性:報道倫理(偏向報道が不信感に繋がる)

B 班 廣間:(政治)責任の所在を分割し明確にすること 与党や野党
透明性
(市民)政治への信頼

C 班 永井:(政治)失敗をのらりくらりかわせる→失敗と向き合わない制度に問題がある
(市民)失敗の評価・批判

3. 市長のワクチン接
種・政府内の反応は
様々
政府が最初から認めていたら問題にならなかった?
→ 各自治体に判断を委ねたのが原因?

政府内でも自治体でも方向性・意見がバラバラ

4. 国政での対策の課題点 どうしたら政策に期待できるか
コロナ禍が与党の属人的統合・集団主義の傾向を明らかにしたのではないか
同調圧力を生み出す土壌を考える
会食、恫喝、データ開示の遅れ、不祥事
→ 相次ぐ不祥事にかかわらずなぜ政権交代の大きな機運は高まらないのか
〇会食報道
→ 国民代表にあるまじき行動であった
コロナと人的ネットワーク
「日本的集団主義」:合理的・体系的形成よりも組織メンバー間の間柄
間柄=政党内の「派閥文化」
→ 適任ではない場合も
例)PDF を知らない人が大臣になる

〇そもそもコロナ対策は日本政府のどこで行われているのか
大臣に任命されたら専門知識はどの程度求められているのか
他に誰がやるのか?他に任せられる政党がないとして自民党はどのように改善されていく

べきか？

5. 今後の日本

【ディスカッションテーマ2】

**次パンデミックが起こった時に備えて日本はコロナの感情をどう活かすのか、そもそも活かすのか？**

例）台湾の対策

SARS・MARS を活かした対応

集団が一方向に向かっている

A 班 西原：緊急事態宣言の時点で何度も同じ事を繰り返している

一回痛い目見ないと政治家が動かないのでは？（与党交代）

でも政治体制が新しく変わっても根本が変わらないと

D 班 小泉：マニュアル化（とりあえずすぐ動けるように）

国民側も活かすために風化させないことが大切

一度収束後に全体を振り返る・反省する

B 班 鈴木：民間・航空機や飲食店などは生かせると思う

国・そもそも失敗として認めない

先を見通して行動することができない

C 班 井上：根底を変えるのは難しい→あまり変わらない

表面的には反省を活かしているアピールしそう→しかし穴だらけ・曖昧

今動いてない時点でおかしい

森先生：東日本大震災、阪神淡路大震災

・東日本大震災→原発全廃（ドイツ）

・では日本は？→未だ稼働

対応ができると考えたからなのか、経済を優先させたいからなのか

意思決定する人が高齢・未来のことは関係ないというスタンス

・災害後の対応を見る限り繰り返しにしか感じない

『失敗の本質』から
今後の日本を考える

1

1.
「戦略策定」の失敗　（担当：鈴木）

2

日本軍における「戦略策定」の特徴
1.主観的
2.帰納的：個々の特殊な事実から一般的な原理、法則を導く
（演繹：一般的な原理・原則などから個別な事項を導く）
3.情緒や空気が支配
→論理的な議論なし、情緒重視、場当たり的

3

Q. 緊急事態宣言の繰り返しに意味はあったのか
→場当たり的なものではなかったのか
→根拠、理論に基づくものではなかったのか
日本軍のような戦略策定時からの違うがあったのではないか

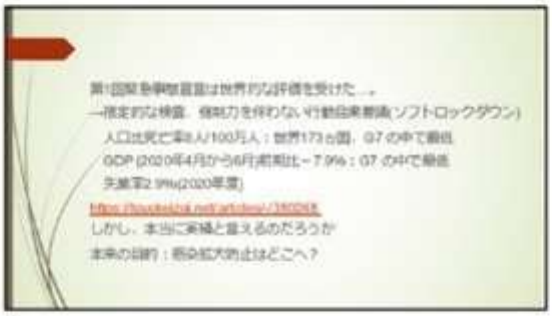
4

第1回緊急事態宣言(2020年4月7日から5月25日まで)
・2020年3月13日に成立した「新型コロナウイルス対策の特別措置法」に基づく
・全国的かつ急速な感染による国民生活及び国民経済に重篤を及ぼす
・公衆衛生
・人との接触機会7割、感力8割削減、幅広い休業宣言
https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/emergency/

5

(緊急宣言の特別基準(感染的には総合的に判断)) 2020年5月時点
(1)感染状況
10万人あたり直近1週間で0.5人程度
(2)医療体制
重症患者数、病床の状況
(3)検査体制
PCR検査数
→明確な数値での基準が乏しい、主観的であった

6


第1回緊急事態宣言は世界的な評価を受けた →
→限定的な検査、強制力を伴わない行動自粛要請(ソフトロックダウン)
人口当死亡率8人/100万人：世界173ヵ国、G7の中で最低
GDP (2020年4月から6月)前期比－7.9%：G7の中で最低
予算案2.9%(2020年度)
https://toyokeizai.net/articles/-/360568
しかし、本当に素晴らしと言えるのだろうか
本来の目的：感染拡大防止はどこへ？

7

2回目の緊急事態宣言(2021年1月8日から3月21日まで)
←当初は2月7日までであった、2回の延長で上記の期間に
政府分科会によるステージ制が存在した
ステージ制：2020年7月31日に撤廃、当初は明確な数値基準なし
2回目の前(10月末から)に数値的な基準が示される
しかし、専門家はこの数値には触れずに会見を行った
https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/corona-data-kit/data_04.html

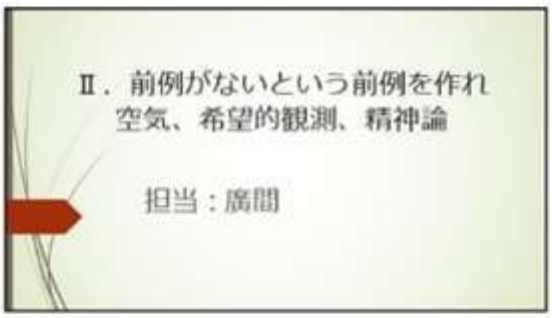
8

2回目の会見で
「飲食店を中心としたピンポイントの対策」
→飲食店の午後8時までの営業、酒類提供の制限、出勤者7割減
根拠：東京で6割を占める経路不明の感染の原因の多くが
飲食が原因と推測
1回目よりも範囲の狭い対策、根拠が不透明である
先述のステージ制(データ、指標)に基づく対策であったのだろうか
https://www.kantei.go.jp/jp/99_suga/actions/202101/07yukan.html

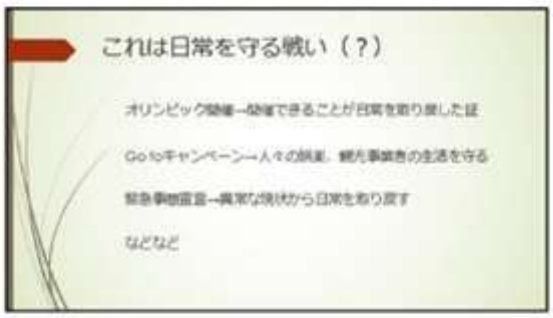
9

まとめ
・1回目の中途半端な成功が今もなお、官邸の発想の部分に影響している
→オリンピックは開催する、飲食店のみへの休業
・数値、データの軽視
→ステージ制度の効果的な使用がされていない、
単純感染者数が増えたから営業を出すという場当たり的で、
主観的判断に基づく
・議論の有無
→会見内容からは建設的な議論の有無を感じない、専門家の独壇ばかり

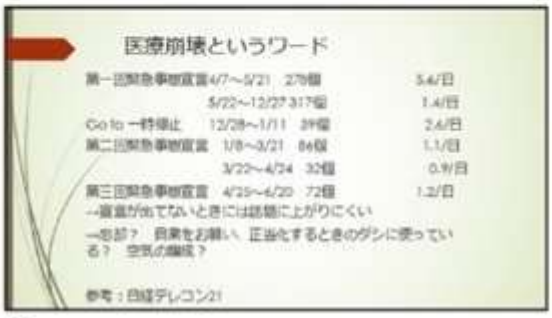
10


Ⅱ．前例がないという前例を作れ
空気、希望的観測、精神論
担当：廣間

11

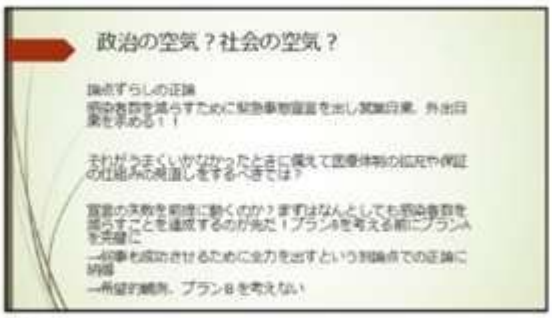

これは日常を守る戦い（？）
オリンピック開催→開催できることが日常を取り戻した証
Go toキャンペーン→人々の倒産、観光事業者の生活を守る
緊急事態宣言→異常な現状から日常を取り戻す
などなど

12



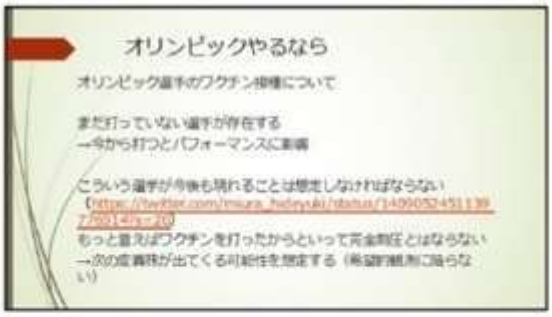

13

14

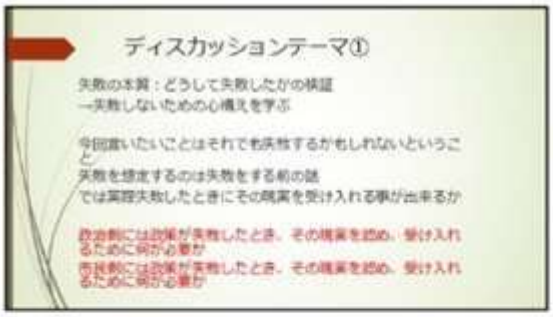



15

16




17




18

首長のワクチン接種をめぐる騒動

担当：岡田

19

20

政府内の反応

21

- 政府が首長の優先接種を最初から認めていれば問題にならなかった？
- 各自治体に判断を委ねたのが原因？
首長やその親族が感染すると、運営に支障が生じる

医師の6割以上は自治体首長への優先的なワクチン接種に賛成

かつての日本軍の作戦指導の企画的確立の失敗

22

Ⅲ．国政での対策の課題点
～どうしたら政策に期待できるか～

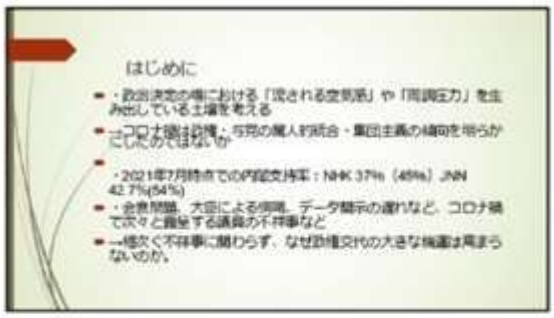
担当：前田

23

はじめに

- ・政治決定の場における「流される空気感」や「同調圧力」を生み出している土壌を考える
- →コロナ禍は政権・与党の属人的統合・集団主義の傾向を明らかにしたのではないか
- ・2021年7月時点での内閣支持率：NHK 37%（46%）JNN 42.7%(54%)
- ・企業問題、大臣による失言、データ提示の遅れなど、コロナ禍で次々と露呈する議員の不祥事など
- →幾度く不祥事に関わらず、なぜ政権交代の大きな機運は高まらないのか。

24



## 会食報道

- 会食報道
- 2020.10.23 分科会が５人以上の会食を控えるように呼びかけ
- 2020.12.14 菅首相、二階幹事長が８人で会食（ステーキ会食）、出席者は全員重症化リスクの高い70代以上
- 2020.12.17 俣主駐子五輪担当相（当時）が６人で会食
- 2021.1.6 日本医師会中川俊男会長「国会議員は数の会食自粛を」
- 2021.1.6 与野党、会食自粛を所属議員に要請（第二回緊急事態宣言発出日）
- 2021.1.8 西村経済再生担当相、福岡で元副大臣らと六人卓で会食
- 2021.1.16 自民党石破元幹事長会長代行が、国会議員秘書ら、大使館関係者ら計８人で会食（イタリア料理店、感染クラスター判明、保健所で濃厚接触者の一人に）、自民党も謝罪
- https://mainichi.jp/articles/20210205/k00/00m/010/297000c

25

## コロナと人的ネットワーク

- 仮説）太平洋戦争時の日本軍の組織的特徴として挙げられていた集団主義・属人的結合→現在の政策決定の場や、自民党内部にも言えることなのではないか？
- ↓
- 「組織上の失敗要因分析」の章をもとにして照らし合わせていく
- ↓
- cf.）「官僚制の中に柔軟性を混在させ、インフォーマルな人的ネットワークが強力に機能するという特異な組織」（p311）
- 「（日本軍のなかでは）自由闊達な議論が許容されることがなかったため、情報が個人や少数の人的ネットワーク内部にとどまり、組織全体で知識や経験が伝達され、共有されることが少なかった」（p327）

26

## 「日本的集団主義」

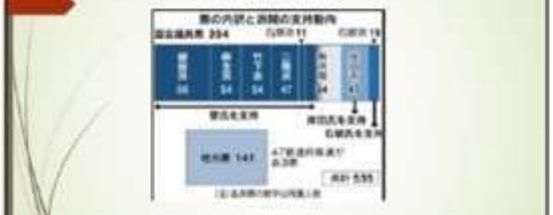
- ・日本的集団主義：「個人と組織とを二者択一のものとして選択肢ではなく、組織とメンバーとの共生をお図するために、人間と人間との間の関係（対人関係）それ自体が最も組織的なものとされる」（p315）
- ・組織目標と目標達成手段の曖昧さ、体系的な手段・選択よりも組織メンバー間の「関係」に対する配慮が重視される（p315）
- ・「関係」中心の組織の意思決定
- →この集団主義的原理が作戦展開・兵站の意思決定を阿吽的に誤らせる
- →重大な失敗につながる

27

## 政党内の「派閥文化」

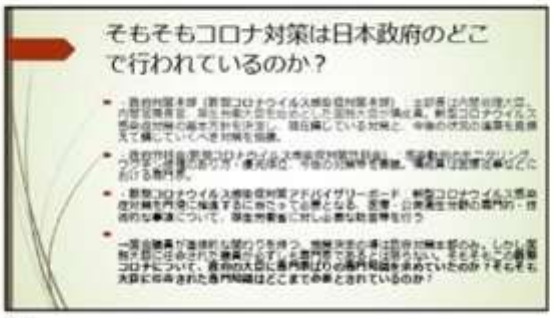
- 選挙：自民党の衆議院、2012年総選挙に勝つ為に、総裁の権限を大幅に強化する改革が実施されている。選挙の際の資金提供や、内閣改造や党役員人事において派閥の総裁に影響力を持つ。
- https://www.asahi.com/articles/ASP1Y5HQ1P1YUTFK00D.html
- 第４章 政権党の中心となる一般参議院議員、衆議院議員、国務大臣、副大臣及び政務官を務めた者に対する調査を通じて、党執行部を中心とするインナーサークルによる人事の支配が強まることになる。過半の公認の重権を握っている。
- https://www.asahi.com/articles/ASP6W6T3LP6WUTFK00D.html
- ・
- ・総裁選をはじめとした内部での激烈争い
- ・内閣人事と無理に連任であるかどうかよりも自党内・派閥内の序列で決まっている？
- 政策形成過程は無派閥を主張、派閥権は所属議員の数に応じた比例配分「参院決戦型」の場合

28

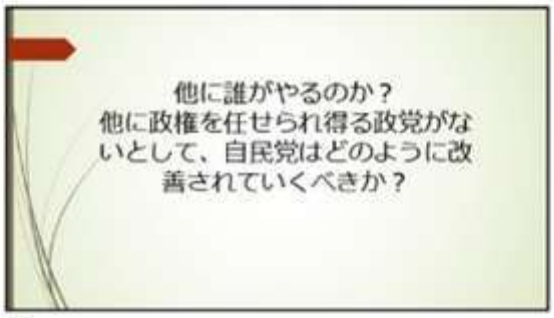


29

30


そもそもコロナ対策は日本政府のどこで行われているのか？

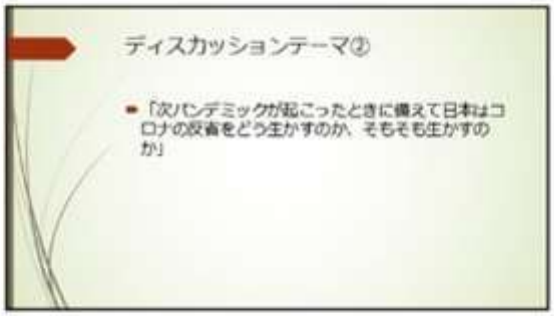
31


他に誰がやるのか？
他に政権を任せられ得る政党がないとして、自民党はどのように改善されていくべきか？

32

Ⅳ．今後の日本
担当:山下

33


ディスカッションテーマ②
「次パンデミックが起こったときに備えて日本はコロナの反省をどう生かすのか、そもそも生かすのか」

34

SARS・MARS後の台湾の対応
危機意識の高まり
伝染病防治法
国家衛生指揮センター＝中央の指揮系統を統一する防災対応メカニズム。
中央流行疾病指揮センター
マスクナショナルチーム
官民一体で医療・生活物資を製造
広報の成功と官民一体の防疫

35

C 班発表

欧米と比べた時の日本の失敗

・ワクチンの遅れ
なぜ欧米のワクチン開発は迅速であったか

1. 国家としての危機管理意識が高かった
ワクチン開発を国の安全保障の柱と位置付けていた

2. ワクチンの器を持っていた
抗原の遺伝子情報の入れ替えができればワクチンが作れた
＝ウィルスの出現を待つだけだった

3. ワクチン研究への資金投入
企業や大学に巨額の資金を投入していた
ドイツのキュアバック社とかモデルナ社
すでに投資できていた
薬事申請と承認での時間短縮が大幅にできていた

具体例:イギリスのアストラゼネカ
わずか 3 ヶ月

日本が遅れた原因

1. ワクチン開発の意識の差
開発予算→日本は少額で意識が低かった、分配していくからさらに少額に
アメリカは各会社に大量の予算

2. 平時からの蓄積の差
インフルエンザの時も維持管理費は企業負担
新しいものも開発案があったが、資金が出されなくて頓挫

日本:適応が適応能力をしめだす
清潔になれすぎた

ディスカッションテーマ

今現在、適応しすぎていて（なれすぎていて）何かあった際に危険なことは何があるだろうか。

A 班 三塚くん

日本の鉄道に慣れすぎて、ちょっとの遅れで間に合わない
緊急事態宣言に慣れすぎている
災害があることの当たり前、避難が遅れる、判断基準に自分の感覚が入ることでの危険

D 班 藤澤くん

電子機器の遅れ
戦争のリスク、テロ（新幹線での事件）
テーマから外れる
どこまでの範囲で見れば良いのか→わからない
適応しすぎてよかった点、
避難訓練の例、無意識に行動できる

B 班 前田さん

テロ、食料自給率
日常の中から国家間の問題までキリがないよね
日本だから慣れていること、地震、津波とか
危険人物とかはよそと比べると大きな反応になる
慣れすぎたものが日本人化している

C 班 村岡くん

いきやすいように最適化されている→代替化できないもの
電子機器や食料
食物も自分で作ったりはできないので危険
賞味期限を守りすぎると適応できなくなるんじゃない？

発表（続編）

本当に失敗なのか？本当の失敗の本質とは言えないのではないか

成功と言えるかもしれない日本事例

1．日本の感染者数と死亡者数の少なさ
世界と比べた時、少ないと言える
コロナの特徴は高齢者の重症化リスクが高い、人混みや長時間の濃厚接触者で感染リスクが高まるけど、

日本はすごく当てはまるけど、抑えられているのでは？
数としては抑えられている

2. コロナによる経済被害が小さい
対応策の良し悪しは関係なく、感染者数と経済被害だけでみると、必ずしも失敗とは言えない

対策は失敗だが、結果だけ見ると失敗とは言えない

↓
なぜコロナの被害が少なく抑えることができたか？1.
ウィルス事態に働きかけた（ワクチン、特効薬）
2. 感染者数の拡大を防いだ（非常事態宣言、三密）

ワクチンを受けた人は少ない
特効薬も日本製も少なく、重篤者のみで大量生産もできていない
非常事態宣言もそもそも母数が少なかったから、政府の対策のおかげとは言えない

では、政府ではないのなら、日本の風土、国民、民間の努力によるものではないか？

日本時の国民性
勤勉、礼儀正しい、親切→政策に足して従うし、失策にも暴動を起こすことがない
↓
国策をそもそも当てにしない国民＆無能な政府
組織論的な失敗が国にとっての本質的な失敗にはなり得ないのではないか？

ディスカッションテーマ

失敗の本質とは何か？
組織論的なものではないと考えたとき、失敗の本質は何になるのか。

A 班 三塚くん

過ちてこれ学ばず
次に起きた時に対応できれば良いが、それができないことが失敗になる

D 班 小島くん

国民政府で分ける前提ではあるが、合わせて日本という組織的になる

曖昧な目的だったり、商機的視点の不足は個人にもあるし、全体にも当てはまる国民が政府を正そうとしないことが問題

一つのものが出てきたときに、他の提示を出さずに合わせて行ってしまう、これが問題になるのでは

これの原因として、模範解答に合わせにいく教育によって作り上げられて行っているのではないか、

逸脱への恐れ、答えに従うことでの安全を選ぶ、主体性が失われていく要素の一つなのではないか

B 班 山下くん

失敗とは何か
敗戦を失敗とすると、組織論として失敗だけど
敗戦によって平和な世の中になったから成功とも言える？
のように、失敗は個人に帰属してくる
負の面と捉えるかそうではないかは人による

C 班 戸島くん

同じ過ちを犯したとき、失敗と呼べる
学ばないことが本質となるのでは

森先生コメント

・菅総理の記者会見における質問に対する答え方
→議論とは言えない（誰も何も言えない）→そのことに適応している国民

・本質１：議論やトークをしないこと
→それが民主主義であるという思い込み
・議論に勝ち負けはない
→ともに真理を追求するものである
→間違えることに敏感である日本人
→誰も傷つけないようにしようとする

・本質２：組織論は存在しない
・失敗の裏にある成功体験
→戦略や戦法によって勝ったのか？
→偶然に救われた勝利をどう捉えるのか
Ex 満州における兒玉健太郎と乃木希典

・『失敗の本質』が出版された時代背景
→高度経済成長期後
→バブルは成功と捉えることができるのか
→北米や西欧の技術をコピー輸入
→独自で何かを作り出す意識の欠如

→これは成功なのか？

Ex 90 年代、それ以降のリーディングカンパニー
Ex ソニーやパナソニックの成功体験

・シオノギが提供予定のワクチンについてどう考えるか
→コロナのワクチン配給と戦後の米配給
→シオノギとタケダの関係性
→先端薬品よりも家庭薬品
→タケダ薬品と長谷川

ゼミ合宿代替授業
C班発表

井上、戸島、永井、村田

1

## 欧米と比較した日本のコロナ対策

①欧米と比較した日本の失敗

②欧米と比較した日本の成功

2

## 欧米と比べた際の日本の最大の失敗

それは・・・

**ワクチン開発の遅れ**

3

「主な新型コロナウイルスワクチンの開発状況」（7/2時点）

4

## なぜ欧米のワクチン開発は迅速であったのか

①「国家としての危機管理意識が高かった」

＝ワクチン開発を「国の安全保障の柱」と位置づていた

→パンデミックやバイオテロへの備えとして、世界ではワクチンが安全保障上のカギになると認識され、国を挙げて準備が進められていた

5

②「ワクチンの器を持っていた」

ワクチンの器とは？？
→「ウイルス・ベクター」とよばれるもの

→抗原の遺伝情報さえ入れ替えれば、迅速にワクチンを作製することができる
＝ウイルスの出現を待つだけの状態であった

6

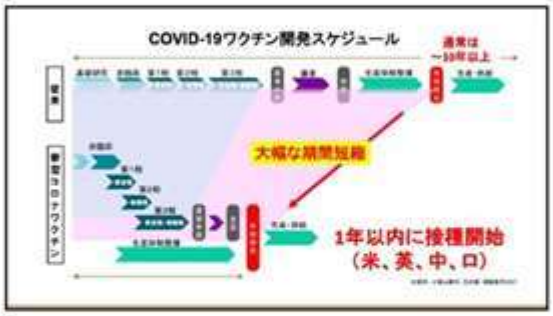
③「ワクチン研究への資金投入」

例）米国国防省の国防高等研究計画局(DARPA:通称ダーパ)
→有事に備えて2011年から、次世代型のRNAワクチンの研究をおこなう
ベンチャー企業や大学に資金投入

1.ドイツのキュアバック社(CureVac)へ

2.モデルナ社へ

7




8

欧州のワクチン開発

「イギリス」
・アストラゼネカ製のワクチン
2020年1月11日に中国のウイルス学者が新型コロナウイルスのゲノムをインターネット上で公開してから、わずか1ヵ月後の2月23日には臨床試験を開始している

9

欧米と比較して日本のワクチン開発が遅れた原因

①ワクチン開発への意識の差

②平時からの蓄積の差

10

①ワクチン開発への意識の差

・ワクチン開発予算

日本：第一次補正予算　約100億円（2020年4月）
　　第二次補正予算　約2000億円（2020年6月）

米国：「ワープ・スピード作戦」　1兆円以上
　　モデルナに約500億円、アストラゼネカに約1000億円を支援

11

②平時からの蓄積の差

では、日本が米国と同じ規模の予算を投じていれば
ワクチンを開発できたのだろうか。

⇒答えはNO

⇒平時の研究開発の蓄積の差が大きい

12

## ②平時からの蓄積の差

・2009年～2010年　新型インフルエンザの流行

→政府有識者会議が「ワクチン製造業者の支援や開発の推進、生産体制の強化」を提言

しかし、膨大な維持管理費は企業負担

・mRNAワクチンの開発

→資金提供が得られず、18年に計画が凍結

13

## 「失敗の本質」

日本は、清潔な環境であるという慢心から

ワクチン開発がおくれてしまったのではないだろうか

⇒「適応は適応能力を締め出す」(「失敗の本質」349頁)

清潔な環境に適応しすぎて、いざという時の対応力を失ってしまったと言えるのでは

14

## ディスカッションテーマ

Q. 今現在、適応しすぎいて（慣れすぎていて）何かあった際に危険なことは何があるだろうか？

15

ここまでは日本政府の失敗について見てきましたが…

本に書かれている失敗の本質は
実は、本当の失敗の「本質」とは言えないのではないか？

そこで・・・

あえて
**「日本のコロナウイルス対策は本当に失敗だったのか」**
という視点から考えてみる

16

## 成功といえるかもしれない日本の事例①

・日本の感染者数、死亡者数の少なさ

！感染者数の国別比較　！死亡者数の国別比較

17

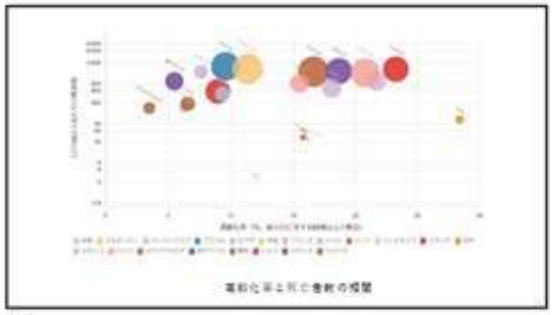
・G20の国の中で比較すると、日本の感染者数・死亡者数はかなり少ない

・新型コロナウイルスの特徴は…
⇒高齢者の重症化リスクが高い
人混みや長時間の濃厚接触で感染リスクが上がる

・日本は高齢者の割合が世界一
・大都市の人口密度は高い

日本は感染しやすい特徴を持ちながらも、感染爆発を押さえ込んでいる…？

18



19

## 成功といえるかもしれない日本の事例②

- 2021年2月の時点で
  日本のコロナ対応は14位
  ※このランキングは「コロナ被害」「経済被害」を数値化した上でランク付けしたもの
- 「コロナ被害」「経済被害」ともに
  欧州各国と比較しても日本は軽微

対応の仕方ではなく数値やデータなど「結果」を見れば日本の対応は必ずしも失敗とは言えない…？

20

## なぜ日本はコロナの被害を少なく抑えることができたのか？

- コロナ対策における国の対応策としては、以下があげられる。

**①ウイルス自体に働きかけた（ワクチン、特効薬）**

**or**

**②感染者数の拡大を防いだ（非常事態宣言、三密）**

カミュの国、日本においてワクチンを少なくとも1回は接種した人は5%に到達される
また特効薬は望しても、レムデシビル、デキサメタゾン、バリシチニブなどあるが、症状改善はいまだ限定的であり、大規模な効果は得られていない現状
非常事態宣言、その実効はさておき日本の感染者数は世界と比較して少ない傾向にある

21

## なぜ日本はコロナの被害を少なく抑えることができたのか？

・コロナの被害が少なかったのは、政府による国策が要因ではない？
→日本の風土、国民・民間の努力によるものなのではないか？

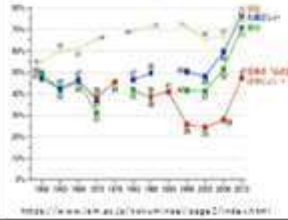
・衛生面が整っていた
・手洗い、うがい、マスク着用が根付いていた
・まじめな国民性

等々…

22

## 日本人の国民性

・特に日本人の国民性について考える



**結果として、日本国民は政府に責めることなく、自身らに問題に対応するために動いてきたのかは知れない？**

23

## 失敗の本質とは

要するに日本は歴史的に見て

**国策をそもそもあてにしていない国民＆無能な政府**

という構図を保っており、政府の組織論的な失敗が、国にとっての本質的な失敗にはなりえないのではないか？

つまりこの本における失敗の本質は政府という組織における失敗の本質にはなりえるが、**日本としての失敗の本質にはなりえない**

24

ディスカッションテーマ

***失敗の本質とは何か？***

25

参考文献


・人口あたりの新型コロナウイルス感染者の比較【世界・諸国】2021/07/08
https://web.sapmed.ac.jp/canmol/coronavirus/index.html
・チャートで見る世界の感染状況｜日本経済新聞　2021/07/08
https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/coronavirus-chart-list/
・【解説】なぜ日本では新型コロナウイルスの死者が不思議なほど少ないのか
BBC NEWS JAPAN　2021/07/08
https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-53735579
・日本は何位？　新型コロナ対応国別ランキング（中央日報）2021/07/08
https://news.yahoo.co.jp/articles/[redacted]
・コロナ抑え上手く回っているのはどの国か？－50か国ランキング
ユーセイ総研研究所　2021/07/08
https://www.ni-research.co.jp/report_detail/id=65965?pbarea=c


26

参考文献


・新型コロナウイルス 治療薬・ワクチンの開発動向まとめ【COVID-19】17社※UPDATE！ 2021/7/8
https://answers.ten-navi.com/pharmanews/17853/

・世界のワクチン接種状況/NHK 2021/7/8
https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/vaccine/world_progress/


27

D 班発表

**1.新型コロナウイルスに対する日本の施策と問題点**

「問題点」

・短期間で連発されていく

→緊急事態の常態化、解除の基準が曖昧

・着々と進められている政治イベント

酒類が提供

Go to トラベルの結果

感染者数が上昇しているのに開始

・中小企業の業績

→長期的にみたら損害が出てる

・75%が「満足していない」という結果に

**2. 日本政府がとった施策と深掘と分析**

そもそもコロナ対策は失敗なの？

①政府のコロナ政策を評価するか

評価しないという人の割合が多い

②マンボウの

③ワクチン接種

過半数が評価していない

④五輪の開催について

反対が多い

⑤五輪に関するイベントの開催について

76%が反対

⏩政府の施策は失敗

なぜ失敗？

―現状深掘り―

・基準が不明確、目的伝達不足

⇦科学的根拠の軽視や国や地方で異なる権限

**ディスカッションテーマ**

・日本政府が新型コロナウイルス対策で失敗を重ねた原因

・個々の原因に共通している「失敗の本質」

B 班：過程重視のもの、評価されたものを踏襲しているため
C 班：そもそも失敗の定義に疑問（政府の対応と世論）
論理的な説明が足りていないから失敗と捉えられてしまう
A 班：日本的集団主義で政治家たちの自己防衛、本質に触れないようにする、同調圧力がある

**3.失敗要因の分析と要点整理**

「空気」の存在
1. 科学的根拠の不足
空気を読む、同調圧力、空気の支配
科学的根拠よりも政治的事情を優先する
2.責任帰属点の不明確さ
明確にできない→責任の分散
3.長期的視点で考えない対策人
間の性質（正常性バイアス）
多数派が正常性バイアスを乗り越えられない場合に空気が形成
4.5. 調和の過度な重視、属人的統
合、空気を優先したいから
そもそもなぜ空気にこだわるのか←日本人のこれまでの歴史が関係しているのでは？
全てにおいて「空気」が鍵を握る

**4. 日本政府はどのような施策をとるべきだったか**

例）GoTo 政策問題
大消費地の東京を除外してスタート、相次ぐ小出しの修正のうえやっと中止に、、、、、

・問題点
「時」
コロナが収束しないまま開始。
「空気」
始める前から指摘できるような問題を抱えたまま開始。

世論

→感染拡大の面を懸念
結果的に感染拡大によって中止に追い込まれている
→経済発展と感染減少の両立は不可能

・菅総理「決まった政策に口を出すと異動」
→指摘しづらくなってしまう

「時」「空気」の問題を乗り越えつつ、目的達成するにはどうすれば良いか

・施策
①プラン B の想定と基準決め
②内閣人事制度の見直し

**ディスカッションテーマ②**
・日本政府だったら、GoTo キャンペーン施策をどのように実施しますか？
・そのほかに実施すべきだと思う施策はありますか？
B 班
タイミング：去年の夏頃
目的：
①補助金 10 万円を使わないと経済が回らなくなってくる
②商業者たちを増やす
→商業の規模によっても異なる
施策に対しての深掘り不足が問題の根源
C 班
元来政府は、経済回復と感染防止を両立させるべき
GoTo キャンペーンの基準を設定すれば良い
D 班
政府は経済を回さないといけない、国民は感染縮小させたい

森先生
青色申告をしている商店に関しては税金はなし、家賃補助をするべき
中小どれだけの利益があるがはわからない
病院と医者は種類がたくさんあり、それぞれ不仲
未曾有の感染症で連携が取れていなかった

# 日本政府は
# 新型コロナウイルス感染症への
# 対応に失敗したのか

森ゼミ　D班
3年：尾崎、小泉、藤澤
4年：荒畑、小島、鈴木

1

## 目次

1. 新型コロナウイルス感染症に対する日本政府の施策とその問題点
2. 日本政府がとった施策の深堀と分析
3. 失敗要因の分析と要点整理
4. 日本政府はどのような施策を取るべきだったのか

2

## 目次

1. 新型コロナウイルス感染症に対する日本政府の施策とその問題点
2. 日本政府がとった施策の深堀と分析
3. 失敗要因の分析と要点整理
4. 日本政府はどのような施策を取るべきだったのか

3

## 施策事例１：緊急事態宣言

新型コロナウイルス感染症
**緊急事態宣言**

4

## 東京における三回の緊急事態宣言

5

## 政府による緊急事態宣言の発表

6

## 緊急事態宣言発令の基準

7

## 問題点

ゴールが示されずに短期間で連発される「緊急事態」宣言。

- 専門家からは分かれており、過去の知見が乏しい中での判断が続いている。
- その際、最後の砦で「緊急事態」が日常化し、過度な効果が希薄化する。

緊急事態宣言を発令、解除する際の明確な判断基準と根拠のない場当たり。

- 形式上は全会一致が求められているものの、あくまでも「参考」としての意見である。
- その際、第一・諮問委員・判断の材料として示されるのは分かるが、自粛が先行している。
- 感染症を中心とした、短時間で効果が出にくい事象の実証、事あるごとに出されたい緊急事態の特徴要因など。

緊急事態宣言下で着々と進められる政治イベント。

- オリンピックの開催に向けた「聖火」送り。
- 与党政治家による会食を含めたパーティーの実施。

8

## 着々と進められる政治イベント

9

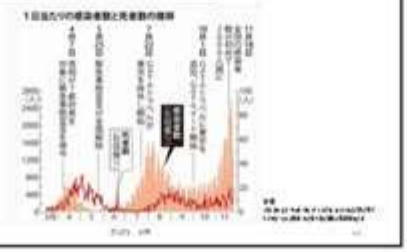
## 施策事例２：Go To キャンペーン

10

## Go TOトラベル事業の結果

11

## Go TO トラベルと感染者数



12

## Go To トラベルと中小企業の業績

13

## 問題点

「感染防止と経済活動の両立」を掲げたものの、経済面にバランスが偏る。

- 緊急事態宣言に「後ろ向き」な印象を与えるなど、政府全体の対応を混乱。
- その後、感染増が懸念された緊急事態の延長を公表。日本の人口の1/10以上を占める緊急事態を解除したことで、国の姿勢と現場のギャップから不安が増幅する。

Go To 政策と人の行き来を後押しすることで、感染を広げるリスクがある。

- 政府が「感染を広げる」と言われても、一般国民には「感染をするかもしれない」という不安感がある。

本当に困っている中小企業には手が差し伸べられていない。

- Go To トラベル事業では、現在はやむを得ない事情な休業の中小企業に手が差し伸べる。

14

## 目次

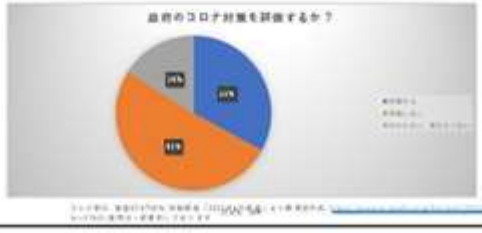
1. 新型コロナウイルス感染症に対する日本政府の施策とその問題点
2. 日本政府がとった施策の概観と分析
3. 失敗要因の分析と要点整理
4. 日本政府はどのような施策を取るべきだったのか

15

## そもそも…

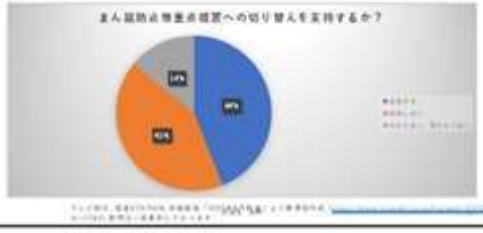
16

## そもそも…①



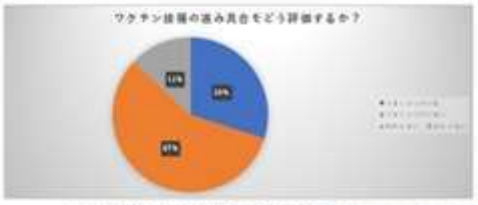
17

## そもそも…②



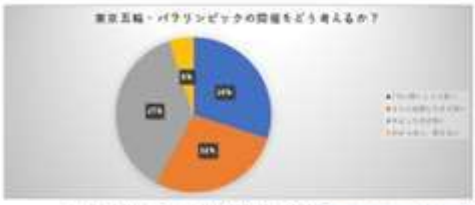
18

## そもそも…③



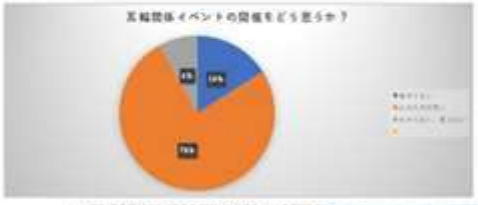
19

## そもそも…④



20

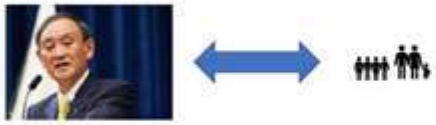
## そもそも…⑤　最後



21

## このように…

政府と対応と国民の感情は離れるばかり…



22

23

24

## 現状深掘り

基準決定 → 基準伝達

25

## 現状深掘り

**基準が不明確**

- そもそも基準の根拠が分からない
  - オリンピックでの酒類提供
  - 緊急事態宣言延長可否
  - 飲食店の酒類提供の基準

**目的の伝達不足**

- 施策目的の伝達不足で行動目標のみを訴える
  - なぜ公園飲みがだめなの？
  - リモートは社会コミュニケーション不足になるから
  - ネオン消灯

次に出す問題を通して皆さんも考えてみてください！！

26

## Q1-1.どのような観点と判断で緊急事態宣言を解除したのか？を読み取りなさい

**国民の皆さんの大変な御協力によって、その効果は歴然と現れており、感染者数が減少していることも事実であります。こうした状況を地域ごとに勘案して、先ほどの対策会議において、6府県において2月28日をもって解除することを決定いたしました。**

**しかしながら、引き続き緊張感を持って、感染拡大防止を徹底してほしいと思っています。**

（首相官邸「緊急事態宣言の一部解除等についての会見」）

27

## Q1-2.どのような観点と判断で緊急事態宣言を解除したのか？を読み取りなさい

**宣言の解除については、新規感染者数、病床の利用率などを目安とし、判断を行う、こう申し上げてきました。1都3県についてはほとんどの指標が当初目指していた基準を満たしています。しかしながら、病床の使用率が高い地域があるなど、依然厳しさが見られます。また、感染者数は減少傾向にあるものの、そのスピードは鈍化しています。人出が増加している地域もあり、いわゆるリバウンドの懸念も高まっています。2月初は、感染拡大を抑え込むと同時に、状況を少しでも前に進めるために必要な期間であります。こうした点を冷静に、そして総合的に考慮し、内閣総理大臣として最後の判断をいたしました。**

（首相官邸「緊急事態宣言の一部解除等についての会見」）

28

## 注意点

- もちろん会見はこの後も続きます。
  もしかしたらこの後の「質疑応答」で解除の観点と判断が読み取れるかもしれませんが、自分は読み取れませんでした。

29

## 原因分析導入（「失敗の本質」と結びつけて）

**基準が不明確**

- 科学的根拠の軽視
- 責任の帰属点が不明確
- 長期的視点を考えない
- どちらかに決めきれない姿勢
- 前例踏襲の姿勢

**目的の伝達不足**

- 「目的を伝えなくていい」姿勢
- 「空気」の存在
- 国と地方で異なる権限
- 伝達のタイミングを逃す（スピードが遅い）

あげればキリがない…

30

## ディスカッション①

・日本政府が新型コロナウイルス対策で失敗を重ねた原因

・個々の原因に共通している「失敗の本質」

議論：10分

31

## 目次

1. 新型コロナウイルス感染症に対する日本政府の施策とその問題点
2. 日本政府がとった施策の概観と分析
3. 失敗要因の分析と要点整理
4. 日本政府はどのような施策を取るべきだったのか

32

## 根底にある共通したもの？

1.科学的根拠の軽視・不足
2.責任帰属点の不明確さ
3.長期的視点を考えない対策
4.調和の過度な重視による弊害
5.属人的統合

「空気」の存在

33

## 1.科学的根拠の軽視・不足

・なぜ軽視・不足するのか？
↓
科学的根拠よりも重視しているものがある？
↓
・実際のデータから得られるものよりもその場に流れる周囲の雰囲気に合わせる ⇨**空気を読む**

・あるデータにより
何かが導かれたとしても、一度浸透してしまうと覆りにくい
⇨**同調圧力　空気を強化する空気という構造（空気の2乗）**

・科学的根拠よりも政治的事情を優先する

34

## 2.責任帰属点の不明確さ

・なぜ不明確なのか？
↓
明確にできないから？
・多元的な制度での5.属人的統合
⇨**責任の分散**

明確にしていないだけ？
・4.人間関係、調和の重視
⇨**責任の忌避(自身も他者へも)**

35

## 3.長期的視点で考えない対策

・なぜ長い目で考えることができないのか？
↓
人間の性質（正常性バイアス）
↓
多数派がこの性質を乗り越えられない場合に空気が形成
⇨ **全体の風潮に合わせる、長い物には巻かれる**
⇨空気を読む/2.責任の忌避

36

## 4.調和の過度な重視　5.属人的統合

・なぜ人間関係の調和を最優先するのか？
↓
空気を保持したいから
↓
なぜそこまで空気にこだわるのか？
・日本人のこれまでの歴史が関係している？
→閉鎖的な空間（島国）での文化の形成
村社会でのルール、不文律
⇒空気を読む
⇒**各個人の思考を殺む**

37

## 全てにおいて「空気」がカギを握る

・古くから日本人が持つこの過度な「空気の崇拝」こそ、成長を妨げ、同じことを繰り返す悪の根源とも言えるのではなかろうか？
・この「空気の崇拝」「空気による支配」をどのように扱っていくべきなのだろうか？

38

## ディスカッション①

・日本政府が新型コロナウイルス対策で失敗を重ねた原因
・個々の原因に共通している「失敗の本質」

39

## 目次

1. 新型コロナウイルス感染症に対する日本政府の施策とその問題点
2. 日本政府がとった施策の評価と分析
3. 失敗要因の分析と要点整理
4. 日本政府はどのような施策を取るべきだったのか

40

## どうすればGoTo政策はうまくいったのか？

41

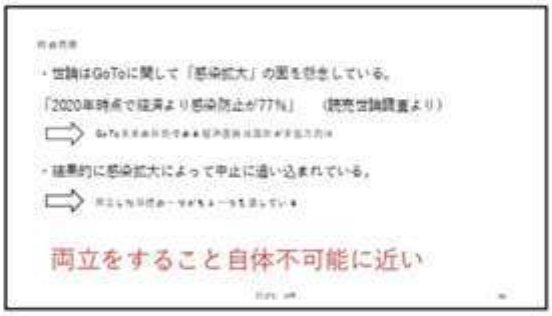
## GoTo政策問題点のおさらい

42

43

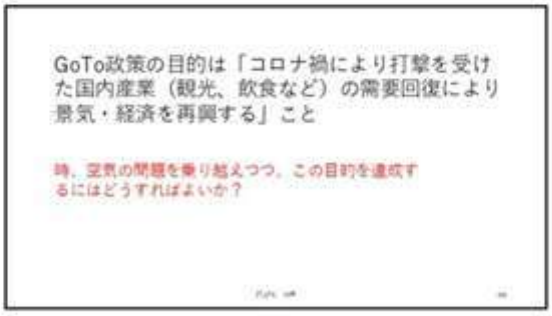
44

45




46

47




48

施策-1：プランBの想定と基準決め

49

施策-2：内閣人事局制度の見直し

50

施策まとめ

•1）プランBの想定と基準決め

•2）内閣人事局制度の見直し

51

ディスカッション②

・皆さんが日本政府だったら、Go To キャンペーン施策をどのように実施しますか。（目的、内容、タイミングなど、、）

・その他に実施するべきだと思う施策はありますか。

議論：15分

52

# 第 2 部

# Stephanie Bell(Kelton)

# The role of the state and the hierarchy of money

# を精読する

*Cambridge Journal of Economics* 2001, 25, 149-163　経済学のケンブリッジジャーナル

# The role of the state and the hierarchy of money
# 国家の役割と貨幣の序列

Stephanie Bell(Kelton)　ステファニー・ベル(ケルトン)

This paper uses Minsky's definition of money as a two-sided balance sheet phenomenon to challenge many common positions on the nature, evolution and role of money.
この論文は、貨幣の性質、進化、役割に関する多くの共通の立場に挑戦するために、Minsky の（収入と支出の）二側面現象の貸借対照表としての貨幣という定義を用いる。

His definition is applied to two opposing theories in the history of monetary debates, and it is shown that the Chartalists (as opposed to the Merallists) developed a *general* theory of money that can be applied equally convincingly to the entire era of state money.
彼の定義は、貨幣論争の歴史において、二つの対立する理論に適用され、また表券主義者（金属主義者に対照的なものとして）は国定貨幣の全ての時代に平等に説得力をもって適用できる貨幣の一般理論を発達させたことが示されている。

This theory is then used to show that the state's power to make and enforce tax laws renders its money the most acceptable from of debt within what can be considered a 'hierarchy' of monies.
この場合、この理論は、税法を制定し施行する国家権力が、貨幣の「序列」と考えられることが可能な範囲内で、その貨幣を最も受け入れられる形式の負債に変えていくことを示すために用いられる。

This leads to some important policy implications as well as a strengthening of the endogenous money position.
これは、内生的な貨幣の位置の強化といくつかの重要な政策的含意に繋がる。

Key words: Money, Taxes, Chartalist, Metallist, Monetary theory
キーワード：貨幣、税、表券主義者、金属主義者、貨幣理論

## 1. Introduction
## 1. 導入

The purpose of this essay is to analyse more thoroughly what several economists (e.g, Minsky, 1986; Foley, 1987; Wray, 1990) have recognized as a debt-pyramid or 'hierarchy of money', which exists in all modern economies.

このエッセイ（論文）の目的は、何人かのエコノミスト（例えば、Minsky、（1986 年）、Foley（1987 年）や Wray（1990 年））がすべての現代経済に存在する債務ピラミッドあるいは「貨幣の階級（序列）」として認識したものをより徹底的に分析することである。

Because a theory of money is the foundation for an analysis of the 'hierarchy', the paper begins with a definition and discussion of the manner in which money will be treated in the essay.

貨幣の理論は「序列」の分析の基礎であるため、この紙（紙幣）は、貨幣が扱われるやり方の定義と議論から本論文は始まる。

This definition is then applied to an analysis of two opposing theories of money, the Metallist and Anti-metallist (or Chartalist), in order to determine which conforms to the requisite definition of money.

このとき、この定義は、2 つの相反する貨幣理論、金属主義者（メタリスト）と反金属主義者（または表券主義者）の分析に適用され、どちらが必要不可欠な貨幣の定義に適切かを決めるためである。

The most compatible theory is then used to describe the structure and composition of the hierarchy.

次に、最も適合する理論を使用して、序列の構造と構成を記述する。

Specifically, the Chartalist theory is used to explain why the various monies are denominated in a particular unit of account and why certain monies within the hierarchy are positioned higher than others.

具体的には、表券主義者の理論を使って、なぜさまざまな金銭が特定の計算単位で表示されるかということと、なぜ序列内の特定の貨幣が他の貨幣よりも上位に配置されるかを説明する。

The positioning of the state's money at the top of the pyramid implies an intimate relationship between 'the fiscal, tax-raising, authority on the one hand and money creation on the other' (Goodhart, 1997, p. 1).
ピラミッドの頂点に国定貨幣を配置することは、「財政、増税、権威と貨幣の創造」の間の密接な関係を意味する（Goodhart、1997、p.1）。

This relationship, when maintained, enables (or, at least, does not preclude) the use of counter-cyclical fiscal policy and may, as Wray (1998) and Kregel (1999) have argued, be the key to maintaining full employment.
この関係が維持されると、反均衡の財政政策の使用が可能になり（または少なくとも不可能ではない）、Wray（1998）と Kregel（1999）が主張しているように、完全雇用を維持するため（失業者対策）の鍵となる可能性がある。

However, when severed, as for example under European Economic and Monetary Union (EMU), the traditional connection between the Treasury and the Central Bank disappears, leaving member states (even in the absence of deficit-to-GDP and debt-to-GDP limits imposed by the Growth and Stability Pact) unable to finance large, counter-cyclical deficits (Parguez, 1999).
しかし、例えば欧州経済通貨同盟（EMU）のように（関係が）切断されると、財務省と中央銀行の間の伝統的なつながりは失われ、残された加盟国は（「成長」と「安定協定」によって課せられた制限によって GDP に対する不足と GDP に対する債務がない場合でも）大きな反均衡的な赤字を賄うことができない（Parguez、1999）。

While these and other important policy implications follow from the analysis contained in this essay, the purpose of the current paper is to elucidate a theoretical foundation for an understanding of the 'hierarchy' underlying studies such as these.
これらおよび他の重要な政策の意味合いはこの論文に含まれる分析から得られるが、本論文の目的は、これらのような研究の基礎となる「序列」を理解するための理論的基盤を解明することである。

Manuscript received 23 March 1998; final version received 30 July 1999.
初稿　1998 年 3 月 23 日受け取り；最終稿　1999 年 7 月 30 日受け取り

Address for correspondence: アドレスは以下の通りです:
Stephanie Bell, University of Missouri-Kansas City, Department of Economics, 211 Haag Hall, 5100 Rockhill Road, Kansas City, MO 64110, USA; email BellSA@umkc.edu

*University of Missouri-Kansas City. This paper was written while the author was Cambridge University Visiting Scholar at the Jerome Levy Economics Institute and was presented at the 1998 meetings of the Eastern Economic Association in New York City. The author would like to acknowledge financial support from The Center for Full Employment and Price Stability and to thank John Henry, Jan Kregel, James Tobin, Douglas Vickers, L. Randall Wray and two anonymous referees for helping to improve the arguments developed in the paper. None, of course, is responsible for what follows.

*ミズーリ州カンザスシティ大学　この論文は、著者がジェロームレビー経済研究所のケンブリッジ大学客員研究員出会った時に書かれ、1998 年にミューヨーク市で開催された東部経済協会の会議で発表された。
著者は、完全雇用と価格安定のためのセンターからの財政的支援に感謝し、ジョン・ヘンリー、ヤン・クレゲル、ジェームズ・トービン、ダグラス・ビッカース、L・ランダル・レイ、および論文で展開された議論の改善を支援してくれた 2 人の匿名の事前審査員に感謝する。もちろん、ここに名を連ねた人に責任はない。

## 2. Money defined
## 2. 貨幣はどのように定義されていたか

Economists have grappled with the concept of money for centuries.
経済学者たちは何世紀にもわたって貨幣の概念を取り扱ってきた。

For some, money is a complicated phenomenon which is difficult to define and which, in its modern form, seems almost impossible to explain.
ある人たちにとっては、貨幣は定義するのが難しい複雑な現象であり、そして現代においてこれを説明するのはほぼ不可能なように思われる。

After all, what is money——a numeraire, a medium of exchange, a store of value, a means of payment, a unit of account, a measure of wealth, a simple debt, a delayed form of reciprocal altruism, a reference point in accumulation, an institution, or some combination of these?
結局、貨幣とは何なのだろうか——通貨交換比率基準、交換手段、価値の保存形態、支払い手段、計算単位、富の尺度、単なる負債、相互利他主義の遅延形式（貨幣の一般性の高さがこれを可能にする）、蓄積の基準、制度、もしくはこれらをいくつか組み合わせたものだろうか？
It is important to begin by boldly stating the manner in which ‘money’ will be defined in

this essay: Money is credit (Innes,1993).
この論文において「貨幣」がどのような方法で定義されるのか、ということを始めに大まかに言明しておくことは重要である。貨幣とは信用である（Innes, 1913）。

It represents a debt-relation, a promise or obligation, which exists between human beings and cannot be identified independently of its institutional usage.
それは人間同士の間に存在する債務関係、約束、あるいは義務であり、その制度的な使用から独立して特定することはできない。

It expresses a social relation (Foley,1987; Ingham, 1996) and will, following Keynes (1930), Minsky(1986) and Wray(1990), be treated as a two-sided balance sheet operation.1
それは社会的な関係を表していて（Foley, 1987; Ingham, 1996）、Keynes(1930)、Minsky(1986)、Wray(1990)によれば、貸借対照表の働きとして扱われる。1

[1] Implicit in this treatment is the notion that money evolves along with contracts and private property. Balance sheets cannot pre-date money because they are used to record money-denominated assets and liabilities. For a much more detailed analysis of this process, see Wray (19
注1　この扱いには、契約や私有財産とともに貨幣が進化するという考え方が含まれている。バランスシートは、貨幣建ての資産と負債を記録するために使用されているため、貨幣が先行することはない。このプロセスのより詳細な分析については、Wray (1993)を参照されたい。

Thus, the creation of money affects both assets and liabilities.
As money has been defined as credit, the latter, for clarity, should also be defined.
故に、貨幣の創造は資産と負債の両方に影響を与える。
貨幣は信用と定義されてきたので、負債もまた明確に定義されるはずである。

Innes gives a succinct yet unambiguous definition of credit:
Innes は簡明でかつ明快な信用の定義を示している。

Innes の引用部分
It is simply the correlative of debt. What A owes to B is A's debt to B and B's credit on A.
A is B's debtor and B is A's creditor.

それは単に債務の相互物である。A が B に負うことは A の B に対する債務であり、B の A に対する債権である。A は B の債務者であり、B は A の債権者である。

The words ‘credit’ and ‘debt’ express a legal relationship between two parties, and they express the same legal relationship seen from two opposite sides.
「債権」と「債務」という言葉は二人の当事者間の法的な関係性を表しており、二つの異なる立場から見られる同じ法的な関係性を表している。

Whether, therefore, … the word credit or debt is used, the thing spoken of is precisely the same in both cases, the one or the other word being used according as the situation is being looked at from the point of view of the creditor or of the debtor … credit and credit alone is money. (Innes, 1913, p.392)
故に、債権という言葉が使われようが、債務という言葉が使われようが、言っていることは全く同じであり、場合に応じて使われている債権という言葉は債権者の立場から見られており、あるいは債務という言葉は債権者の立場から見られている…債権と信用それだけで貨幣なのである。(Innes, 1913, p.392)
Innes の引用部分ここまで

It is because money is at once an asset (credit) and a liability (debt) that it is treated as a balance sheet operation.
貸借対照表操作として扱われるのは、貨幣は資産(貸方)であり、同時に負債(借方)であるからである。

Keynes also took this approach, noting that ‘[a] money of account comes into existence along with debts, which are contracts for deferred payment, and price lists, which are offers of contracts for sale or purchase’ (1930, p. 3).
ケインズもこの考え方をとっており、「口座の貨幣は、繰延払いの契約である債務や、売買契約の申し出である価格表とともに存在する」と述べている。

Thus, when a buyer (debtor) and a seller (creditor) enter into a forward contract, money (or, equivalently, credit and debt) is created. The money represents a promise or IOU held as an asset by the creditor and as a liability by the debtor.
このように、借方（債務者）と貸方（債権者）が先物契約を結ぶと、貨幣（あるいは同等の信用と負債）が発生する。貨幣は、債権者が資産として、債務者が負債として保有する約束やIOU(I owe you)を表している。

The creation of money, then, is simply the balance sheet operation that records this social relation.
したがって、貨幣の創造は、この社会的関係を記録する貸借対照表操作にすぎない。

Minsky confidently noted that there is nothing special or elusive about money.
ミンスキーは、貨幣について特別なものも捉えどころのないものもないと自信を持って述べている。

In fact, he stated, ‘everyone can create money; the problem is to get it accepted’ (1986, p. 228). Though it is certainly true that anyone can create money, it is somewhat misleading to say that the problem is to get money accepted.
実際、彼は「誰でも貨幣を創り出せる。問題はそれが受け入れられるかどうかだ」と述べている。誰でも貨幣を創造することができるということは確かだが、問題は貨幣を受け入れることだというのは少々誤解を招く。

This is because, based on the notion that the creation of money is a two-sided balance sheet operation, money cannot exist until acceptance has occurred.
なぜなら、貨幣の創造は二側面の貸借対照表操作であるという考えによると、受け入れが行われるまで貨幣は存在しないからだ。

Viewed this way, an offer to go into debt (to add a liability to a balance sheet) does not materialize into money until another party agrees to hold that liability (to add it to the asset side of its balance sheet).
このように考えると、借金をする（貸借対照表に負債を追加する）という申し出は、他の当事者がその負債を保有することに同意する（貸借対照表の資産側に追加する）までは、貨幣として実体化しないことになる。

Thus, it is more accurate to say that anyone can make promises or offer to go into debt but that the ‘problem’ is to find someone who is willing to become a creditor (i.e., to hold that promise or debt).
したがって、誰でも約束ができ、借金を申し出ることはできるが、「問題」は、喜んで債権者になってくれる（つまり、その約束や借金を保有してくれる）人を見つけることである、と言った方が正確である。

Let us now apply the notion that the creation of money requires accepting another's debt to two opposing theories of money in order to determine which of the theories conforms to the treatment of money as a two-sided balance sheet phenomenon.
どちらの理論が二側面現象の貸借対照表としての貨幣の扱いに従うかを決定するために、貨幣の創造は一方の負債の受け入れを要求するという考え方を二つの相対する貨幣の理論に適用しよう。

3. Metallists vs. Chartalists
3. 金属主義者 vs.表券主義者

There is no dearth of controversy over the nature and role of money in the history of economic thought.
経済思想の歴史において、貨幣の性質と役割についての論争が少なくないわけではありません。

During the 16th and 17th centuries, the Metallists and the Anti metallists or Chartalists paved the way for successive debates between various schools of thought for centuries to come.1
16 世紀から 17 世紀にかけて、金属主義者と反金属主義者または表券主義者は、その後何世紀にも渡るさまざまな学派の間で継続的な議論の道を整えた。1

1 Actually, Schumpeter (1954) and Vickers (1959) note that the debates may be traced back to Plato (427–347 BC) and Aristotle (384–322 BC).
脚注 1 実際、シュムペーター（1954）とビッカース（1959）は、議論はプラトン（427-347 Bc）とアリストテレス（384-322 Bc）にまで遡ることができると述べている。

The debates continued during the early nineteenth century, with the Currency and Banking Schools serving as the primary participants, and have culminated in today's Monetarist–Keynesian debates.
議論は 19 世紀初頭に続き、通貨学派と銀行学派が主要な参加者となり、今日のマネタリストとケインズ派の議論で最高潮に達した。

Although the classifications of the opponents have changed, the essence of their disputes remains grounded in the early Metallist–Chartalist debates.
反対者達の分類は変わったが、彼らの諸論争の本質は、初期の金属主義者と表券主義者の議論に基づいたままだ。

The Metallists and Chartalists arrived at markedly different conclusions, primarily as a result of their ‘different conceptions of the scope and method of economics’ (Ingham, 1996, p. 511).
金属主義者と表券主義者は、主に「経済学の見方と方法の異なる諸概念」の結果として、著しく異なる結論に達した（Ingham,1996,p.511）。

These differences can, almost invariably, be traced to a distinction between ‘real’ and ‘monetary’ analyses. Schumpeter described ‘real’ analysis as:
これらの違いは、多くの場合、常に「現実の」分析と「貨幣の」分析の違いに起因する可能性がある。

Schumpeter described ‘real’ analysis as:
シュムペーターは、「リアル」アナリシスを次のように述べた

> [proceeding] from the principle that all the essential phenomena of economic life are capable of being described in terms of goods and services, of decisions about them, and of relations between them.
> 【...以下引用】経済生活のすべての本質的な現象は、商品とサービス、それらに関する諸決定、およびそれらの間の関係の観点から記述することができるという原理より
>
> Money enters the picture only in the modest role of a technical device that has been adopted in order to facilitate transactions.
> 貨幣は、取引を容易にするために採用された技術的装置という控え目な役割でのみ登場する。
>
> This device can no doubt get out of order, and if it does it will indeed produce phenomena that are specifically attributable to its modus operandi.
> この装置は故障する可能性が間違いなくあり、故障した場合、それ（貨幣）の操作様式に個別に起因する現象が発生する。
>
> But so long as it functions normally, it does not affect the economic process, which behaves in the same way as it would in a barter economy. (Schumpeter, 1994 [1954], p. 277)
> しかし、それ（貨幣）が正常に機能している限り、物々交換の経済の場合と同じように動作する経済過程には影響しない。(シュムペーター, 1994 [1954], p. 277)

Monetary analysis, in contrast, is characterised as:
対照的に、マネタリーアナリシスは次のように特徴付けられる。

> in the first place, [a] denial of the proposition that, with the exception of what may be called monetary disorder, the element of money is of secondary importance in the explanation of the economic process of reality . . .
> 第一に、[a]貨幣的無秩序と呼ばれるものを除いて、貨幣の要素は現実の経済過程の説明において二次的に重要であるという命題の否定である...

> [and] . . . In the second place, . . . [an abandonment] of the idea that all essential features of economic life can be represented by a barter-economy model. (Schumpeter, 1994 [1954], p. 278)
> [および]... 第二に、... 経済生活のすべての本質的な特徴は物々交換経済モデルによって表すことができるという考えを[放棄]することである。(シュムペーター,1994 [1954],p.278)

Now, while one can certainly link the writings of many Metallists to the kind of 'real' analysis described above, it is an adherence to a particular theory of money, not a penchant for 'real' analysis, that places a theorist in the Metallist tradition.
さて、ある人は確かに多くの金属主義者の著作物を上記の種類の「リアル」アナリシスに関連付けることが可能だが、「リアル」アナリシスにはこだわらず、金属主義者の伝統に位置づけられた理論家の上にある貨幣の個別の理論に執着する。

Let us begin with the two main propositions embodied in the theory of money propounded by Aristotle.
まず、アリストテレスが提唱した貨幣理論に、具体化された 2 つの主要な命題から始める。

First, money, though it may come to serve other functions, is supposed to have originated as a medium of exchange.
第一に、貨幣は、それ自身がほかの機能を果たすようになるかもしれないが、交換の媒体として生じたと考えられている。

Exchange, it is argued, was initially conducted on the basis of barter, with individuals trucking their goods to the local trading venue and attempting to exchange what they brought for what they wanted.2
これは議論されていることだが、交換とは、当初は物々交換に基づいて行われ、個人がその

土地の市場に商品を持ち込み、持ってきたものを欲しいものと交換しようとしたとされている。2

2 This `real` analysis of barter exchange is conducted despite little evidence that barter-economies ever existed（Heinsohn and Steiger, 1989）.
脚注2　物々交換におけるこの「リアルな」分析は、物々交換が存在した、という証拠がほとんどないにもかかわらず行われている。（ヘインソン、スティーガー、1989）

Thus, exchange would have required the famous `double coincidence of wants` so that two- party exchange that could only occur if each of two individuals wished to exchange that which they possessed for that which was offered by another.1
したがって、交換には有名な「欲求の二重一致」が必要であり、そのために二者間の交換は、二人の個人がそれぞれに、自分の持っているものと、相手が差し出してきたものを交換したいと思った場合にのみ、起こりえた可能性がある。1

1 Innes（1913）recognises that a `double coincidence of wants` would never have been required and that credit could have（and, he argues, did）allow exchange to occur in the absence of any physical medium of exchange.
脚注1　イネス（1913）は、「欲求の二重一致」は決して必要とされず、（また彼はこうも主張しているが）信用があれば物理的な交換媒体がなくても交換を行うことができたと認識している。

Money, then, is said to have arisen spontaneously in the private sector in order to eliminate some of the inefficiencies of barter.
そして、貨幣とは物々交換にまつわる様々な不都合を排除するために、民間において自発的に発生したものと言われている。

Thus, society is said to have agreed upon some means of exchange called `money` in order to mitigate the transaction costs associated with barter.2
したがって、社会は、物々交換にともなう取引コストを軽減するために、「貨幣」と呼ばれる交換手段に合意したといわれている。2

2 Almost any mainstream economics textbook attributes some individual advantage to the use of money in exchange. Specially, rational maximizing agents are said to accept money because there is an individual advantage in doing so.
脚注2　ほとんどすべての主流経済学の教科書は、様々な利点のそれぞれが、交換において貨幣を使用することにあると考えている。特に、合理的最大化の機関は、交換において貨幣を使うことにそれぞれ利点があるために、貨幣を受け入れているといわれている。

But as Ingham（1996, p.515）points out, `the advantage of money presupposes a monetary system` since the individual can only benefit from the use of money if others decide to use money as well.
しかし、インガム（1996, p.515）が指摘するように、相手が同様に貨幣の使用を認めた際にのみ、個々人は貨幣の使用による利益を享受することができるため、「貨幣の利点は通貨制度を前提としている」のである。

Secondly, in order to fulfill the medium of exchange function, the thing chosen to serve as money must be a thing that is useful and has exchange value independently of its monetary function （Schumpeter, 1994［1954］, p.63）.
第二に、交換の媒体という機能を果たすためには、貨幣として機能するものに選ばれるものは、有用であり、かつ貨幣機能そのものとは独立して交換価値をもつものでなくてはならない。（シュムペーター、1994［1954］、p.63）

That is, society is supposed to have settled on a metallic currency（usually gold or silver）so that the money would have（intrinsic）value.3
つまり、社会は、貨幣が（本質的な）価値を持つために、（通常金または銀のような）金属貨幣に落ち着いてきたと考えられてきた。3

3 The value of the commodity money given in exchange was supposed to have traded against a commodity with equal value. This `rule of equivalence` in exchange was considered necessary in order for `real` analysis to proceed.
脚注3　交換において与えられた商品貨幣の価値は、同党の価値を持つ商品と取引されていたと考えられている。この交換における「等価の規則」は、「リアルな」分析をすすめるために必要なものであると考えられている。

It is not, however, always clear whether the precious metals chosen to serve as a medium of exchange were in an `unworked` state or whether they had been minted/coined.
しかし、交換の媒体として選ばれる貴金属が「加工されていない」状態なのかどうか、また鋳

造/刻印されたものなのかどうかは、はっきりしていない。

Most theorists believe that exchange using unworked precious metals would have been extremely rare because of the difficulty involved in identifying the quantity and quality of the metal（Goodhart, 1997）.
ほとんどの理論家は、加工されていない貴金属を使った交換は、大変稀であったと信じている。というのも、金属の量と品質を特定することが難しかったからである。（グッドハート、1997）

This `identifiability` problem, they argue, usually meant that commodity money required a stamp or guarantee before it could circulate widely.4
この「識別可能性」問題とは、彼らが言うに、通常商品貨幣とはそれが広く流通する前に、刻印や保証を必要としていた、ということを意味している。4

4 Goodhart（1996）notes that government has most frequently performed the minting function.
脚注4　グッドハート（1996）は、政権がかなり頻繁に鋳造機能を行使していたと述べている。

Aristotle's support for the theory of money put forth so far is evident in the following statement:
アリストテレスがこれまでの貨幣論を支持しているのは、次のような記述に表れている。

以下引用部分
[For the purpose of barter men made a mutual compact to give and accept some substance of such a sort as being in itself a useful commodity...
人は物々交換のために、それ自体が有用な商品であるような種類の物質を与えたり受け取ったりすることを相互に約束した...

finally impressing on it a stamp in order that this might relieve them of having to measure it; for the stamp was put on as the token of the amount. (quoted in Goodhart, 1996, Appendix B)
最後にそれに印を押すのは、それを測る必要をなくすためであり、印は金額の印として押されたからである。(Goodhart, 1996, Appendix B より引用)
引用部分ここまで

But it is not always clear, when reading the Metallist position, who actually performed this minting function private individuals/institutions or the government/public sector though most ascribe a limited role to the government.

しかし、金属主義の見解を読んでも、この鋳造機能を実際に行ったのが誰なのか、個人・組織なのか、政府・公共部門なのか、必ずしも明確ではないが、多くの場合、政府が限定的な役割を果たしたとしている。

For example, it has been suggested that the money chosen by society is either sanctioned (ex post) by the government (Menger, 1892) or that it somehow evolves into government-issued currency (Barro, 1990).
例えば、社会が選択した貨幣は、政府によって（事後的に）承認されるか（Menger, 1892）、あるいは何らかの形で政府発行の通貨に発展するか（Barro, 1990）が示唆されている。

Questions concerning the government's role in the development of money continue today (e.g., Kiyotaki and Wright, 1987), with arguments suggesting at private individuals, motivated by a desire to minimise search costs, could develop money for use in an economy without a government.
貨幣の開発における政府の役割については、現在も疑問視されており（Kiyotaki and Wright, 1987など）、政府が存在しない経済においては、探索コストを最小限に抑えたいという動機から、民間人が貨幣を開発することが可能であるとする議論もある。

Regardless of the party performing the minting function, the important point remains the same:
造幣局がどこであろうと、重要な点は同じである。

the minting or coining of precious metals resolved the 'identifiability' problem and enabled metallic coins to circulate widely as media of exchange.
貴金属を鋳造することで「識別可能性」の問題が解決され、金属貨幣が交換手段として広く流通するようになったのである。

Furthermore, any sanction by the authority of the State would have been limited to an 'ex-post codification of social customs' (Laidler, 1987, p. 21).
さらに、国家権力による制裁は、「社会的慣習の事後的な成文化」（Laidler, 1987, p.21）に限定されていただろう。

Thus, governments could encourage the continued use of metals by vouching for the integrity of the precious metals (the quality and quantity of metal), but their power would have been limited to supporting the will of private individuals to adopt a particular

commodity money.
したがって、政府は、貴金属の完全性（金属の質と量）を保証することによって、金属の継続的な使用を奨励することができたが、政府の力は民間の意志を支援することに限定されていただろう。

In other words, metallic coins are said to have been accepted because they were themselves valuable commodities with certain properties1, which made them a convenient medium of exchange, not because of any influence or encouragement from the state.
つまり、金属貨幣が受け入れられたのは、それ自体がある種の特性を持った価値ある商品であり1、それが便利な交換媒体となったからであって、国家からの影響や奨励があったわけではないとされている。

1 Divisibility, durability and portability are among the properties usually cited (Clower, 1984).
脚注1　可分性、耐久性、可搬性などの特性が挙げられる（Clower, 1984）。

Although this theory embodies two main propositions, only the latter necessarily identifies the Metallist vision.
この理論は 2 つの主要な命題を含んでいるが、後者のみが金属主義のビジョンを必然的に示している。

The Metallist theory, then, suggests that 'the money commodity goes by weight and quality as do other com modities' and that the stamp is put on for convenience 'to save the trouble of having to weigh it every time, but... is not the cause of its value' (Schumpeter 1994 [1954], p. 63).
金属主義では、「貨幣商品は他の商品と同様に重さと質で決まる」とし、切手は「毎回重さを測る手間を省くために便宜的に貼られたもので、価値の原因ではない」としている（Schumpeter 1994 [1954], p.63）。

The transition to the use of coins with little or no precious metal content or paper representing contracts between the bearer and a bank or government led Menger to ask why 'every economic unit in a nation should be ready to exchange his goods for little metal disks apparently useless as such, or for documents representing the latter' (Menger, 1892, p. 239).

貴金属をほとんど含まない硬貨や、所持者と銀行や政府との間の契約を示す紙の使用に移行したことで、メンガーは「一国におけるどの経済単位も、自分の商品を、明らかにそのようなものとしては使用価値がない小さな金属の円盤や、後者（所持者と銀行や政府との間の契約を示す紙）を表す文書と交換する用意ができていなければならないのはなぜか」と問いかけた（Menger, 1892,p. 239)。

The Metallist vision easily adapted to the use of non-'pure' commodity or paper money. It was argued, for example, that non-'pure' metal coins could be substituted for commodity money because their metal backing would imbue them with value.

金属主義者の考え方は、非純粋な商品や紙幣の使用にも容易に適応した。例えば、非純粋な金属製の硬貨は、その金属の信用保証によって価値が付与されるため、商品貨幣の代わりにすることができると主張されていた。

Similarly, bank- or state-issued paper currency, under a metal standard, would be accepted because of its gold or silver backing.

同様に、ある金属本位制の下では、銀行や国が発行する紙幣も、金や銀の信用保証があるからこそ、受け入れられるのであろう。

Thus, the Metallists retained the basic logical structure of their analysis by maintaining a link between these (fiduciary) currencies and precious metals (Ingham, 1996).

このように、金属主義者たちは、これらの（受託）通貨と貴金属との間に関連性を持たせることで、分析の基本的な論理構造を維持したのである（Ingham, 1996）。

When, from time to time, governments suspended convertibility, and paper continued to substitute for commodity money, the Metallists maintained that the currency retained its value because people expected convertibility to be restored.

時折、政府が兌換を中断し、紙が商品貨幣に代替し続ける時があったが、金属主義者たちは、人々が兌換の回復を期待しているからこそ、通貨の価値が保たれ続けると主張した。

The next stage poses more of a dilemma for Metallist theory (and for many modern

monetary theorists). Specifically, the elimination of a metallic backing appears to have robbed paper currency of its value.
次の段階は、金属主義者の理論（そして現代の多くの通貨理論家）にとってより大きなジレンマを引き起こす。具体的には、金属の信用保証がなくなったことで、紙幣の価値が奪われたと考えられる。

That is, while ‘the value of commodity money might appear to derive from that of the commodity from which it is made, or into which it is convertible, and the value of credit money from that of the assets which back it, . . . no such factor seems to explain the value of fiat money’ (Laidler, 1987, p. 20).
つまり、「商品貨幣の価値は、それが作られた、あるいは変換可能な商品の価値に由来するように見えるかもしれないし、信用貨幣の価値は、それを裏付ける資産の価値に由来するように見えるかもしれないが…法定不換紙幣の価値を説明するような要素はない」（Laidler, 1987, p. 20）。

Thus, people were supposed to hold commodity money as ‘a medium of exchange that also [had] use as a consumption good or a productive input, at least potentially’, while fiat money is a ‘medium of exchange that will never be used as a consumption good or a productive input’ (Kiyotaki and Wright, 1987, p. 5).
従って、人々は、商品貨幣を「少なくとも潜在的には消費財や生産の出力としても使える交換媒体」として持ち、一方で不換紙幣は「消費財や生産の出力としては決して使われることのない交換媒体」（Kiyotaki and Wright, 1987, p. 5）であると考えられていた。

That the community did continue to accept intrinsically worthless paper currency after the elimination of a metal standard left a problem for Metallists/Monetarists to explain.
金属本位制が廃止された後も、コミュニティが本質的に価値のない紙幣を受け入れ続けたことは、金属主義者／マネタリストにとって説明すべき問題を残した。

Perhaps the most famous 'solution' came from Walras, who suggested that money could be reduced to a pure number, the numeraire.
おそらく最も有名な「解決策」は、貨幣を純粋な数字に還元することができると提案したワルラスに由来する。

Money may be viewed as nothing more than a representation or a symbol of 'real' goods,

with its origin/evolution considered irrelevant.2
貨幣は、その起源/進化は無関係であると見なされ、「リアルな」商品の表象または象徴にすぎないと見なされる場合がある。2

2.As one referee pointed out, it may be argued that Walras' numeraire is actually itself a real good, rather than merely a representation or a symbol of real goods.
脚注２　ある事前審査員が指摘したように、ワルラスの数字は、単なる実物の表現や象徴ではなく、むしろ現実のそれ自体が本物であると主張されるかもしれない。（そのもの自体が意味を持つ）

In this case, the Walrasian system becomes not a monetary system but simply a complex barter system.
この場合、ワルラスのシステムは貨幣制度ではなく単に複雑な物々交換システムになる。

As a numeraire, money was brought into the analysis only to allow the 'auctioneer' to announce prices (money numbers) in order to bring about market-clearing equilibrium.
数字としての貨幣は、「競売人」に市場清算における均衡をもたらすために価格 (貨幣の数字) を知らせるためだけに、分析として持ち込まれる。

The goal, it seems, was to maintain the 'integrity' of 'real' analysis though, as Clower notes, there are numerous problems with attempts to 'motivate the holding of money by invoking some kind of transactions cost' (Clower, 1999, p. 407).
目標は、「リアルな」分析の「統一性」を維持することだったようだが、Clower が指摘するように、「ある種の交換費用に訴えることによって貨幣の保持を動機付ける」試みには数多くの問題がある（Clower、1999、　p.407）。

The Anti-metallists, or Chartalists were dissatisfied with the Metallists claim that money derives its value from its precious metal content (or backing).
反金属主義者、または表券主義者は、貨幣がその貴金属含有量（または裏付け）からその価値が生まれるという金属主義者の主張に不満を持っていた。

Concerned primarily with bank and state monies, the Chartalists sought to uncover the source of value as more than simply the representation of precious-metal money.
表券主義者は、主に銀行や国家の貨幣に関心を持ち、単なる貴金属の貨幣の表象以上のものとして価値の源泉を明らかにしようとした。

Chartalist theory does not view money as a commodity with exchange value, scarcely different from any other commodity.
表券主義者の理論では、貨幣を交換価値のある商品とは見なさず、他の商品とほとんど変わらないものだと見なした。

Thus, unlike the Metallist vision, the Chartalist view is not preoccupied with the medium of exchange function of money.
したがって、金属主義者の見解とは異なり、表券主義者の見解は、貨幣の交換機能の媒体に終始しているわけではない。

On the contrary, Chartalist theory seeks to uncover the essential properties of money as a unit-of-account and a means of payment.
それどころか、表券主義者の理論では、計算単位および支払い手段としての貨幣の本質的な特性を明らかにしようとしている。

To this end, Chartalist theory is concerned with the social and historical origins of money and, unlike the Metallist vision, provides a non-market-based theory of money.
この目的のために、表見主義者の理論は貨幣の社会的および歴史的起源に関係しており、金属主義者の見解とは異なり、市場に基づかない貨幣の理論を提供する。

Let us turn to an examination of the Chartalist theory of money.
表券主義者の貨幣の理論の検討に移ろう。

Under the Metallist vision, the state takes a back seat to the market.1
金属主義者の見解の下では、国は市場によって成り立っている。1

1 The state, if it enters the discussion at all, is usually brought in to enforce contracts and/or to provide the goods and services that profit-seeking private enterprises would not produce.
脚注 1　一国家は、仮に議論に加わったとしても、通常、契約を執行するため、および/または営利目的の民間企業が生産しない商品やサービスを提供するために持ち込まれる。

Recall that the ‘identifiability’ problem was ‘resolved’ by using the state to provide a

‘public good’ (stamped money) but that it wielded no real power since the type of money in use had been chosen by society.

「同一性保証」の問題は、国家を使用して「公共財」（刻印された貨幣）を提供することによって「解決」されたが、使用される貨幣の種類は社会によって選択されていた以来、実際に力を行使しなかったことを思い出してほしい。

Chartalist theory, however, places the state centre-stage.
しかしながら、表券主義者の理論は国家を中心に置く。

Specifically, Chartalists recognise the power of the state to demand that certain payments are made to it and to determine the medium in which these payments must be made.
具体的には、ある支払いが行われることを要求し、これらの支払いが行われるべき媒体を決定する国家の力を表券主義者は認識している。

Chartalist theory has a long history, perhaps dating back to Plato (Schumpeter, 1994 [1954]), but clearly recognised as early as Adam Smith who wrote that:
表券主義者の理論の歴史は長く、おそらくプラトンにまで遡るが(Schumpeter, 1994 [1954])、早くもアダム・スミスが以下のように書いていることを明確に認識していた。

A prince, who should enact that a certain proportion of his taxes should be paid in a paper money of a certain kind, might thereby give a certain value to this paper money. (Smith, 1937 [1776], p. 312)

王子は、ある種の紙幣で支払われるべき税金の特定の割合を制定する必要があり、それによってこの紙幣に特定の価値が与えられる可能性がある。(Smith, 1937 [1776], p. 312)

What may appear banal at first glance is, upon further contemplation, extremely sagacious.
一見平凡に見えることは、よくよく考えてみると、非常に賢明だ。

In one fell swoop, Smith appears to have solved a paradox that the Metallists were unable to convincingly cope with.
スミスは金属主義者たちが説得力を持って対処できなかったパラドックスを、一挙に解決したようだ。

The paradox—why should paper with no value continue to circulate?
パラドックス―なぜ価値のない紙が流通し続ける必要があるのだろうか？

Recall that the early Metallists traced money's value to its precious metal content/ backing but that modern money (inconvertible state or bank money) provides no such basis for value.
初期の金属主義者は貨幣の価値をその貴金属含有量・裏付けにたどったが、現代の貨幣（変換不可能な国家または銀行の貨幣）は、そのような価値の基準を与えないことを思い出してほしい。

The solution to the paradox, as Smith recognised, is that the paper is not without value!
このパラドックスの解決策は、スミスが認識したように、紙に価値がない訳ではないということだ！

His reasoning does not, however, simply fill a gap in the Metallists' thinking; it is a fundamentally different conception of the source of value in certain money.
しかしながら、彼の推論は単に金属主義者の考え方のギャップを埋めるだけではない。それは、ある貨幣の価値の拠り所についての全く異なる着想だ。

Moreover, Smith's explanation, unlike the Metallists', can be applied equally convincingly whether the medium in which taxes (or other payments to the state) are due is fiat money, paper backed by a precious metal, or commodity money.
さらに、スミスの説明は金属主義者の説明とは違い、税金（または他の国家に対する支払い）が支払われる媒体が法定貨幣、貴金属によって裏打ちされた紙、もしくは商品貨幣であるかどうかに関わらず、同様に説得力を持って適用することができる。

Whatever the prince announces he will accept in payment of taxes will immediately be imbued with value, for it will be demanded as a means of discharging the tax liability.
王子が税金の支払いで受け入れるといったものは何でも、すぐに価値が吹き込まれる。なぜなら、それは納税義務を果たす手段として要求されるからだ。

Thus, irrespective of any inherent property or function, it may come to serve, the value of this money depends on its usefulness in settling tax or other liabilities to the state.
したがって、固有の特性または機能に関係なくそれが役に立つようになる可能性があり、その貨幣の価値は国家に対する税金または他の債務を清算する際の有用性によって決

まる。
Though the above quotation is clearly consistent with the Chartalist view, Smith did not develop the theory in any of his writings (and probably did not appreciate the significance of the argument in any case).
上記の引用は明らかに表券主義者の見解と一致しているが、スミスは彼のいずれの著作においても理論を発展させることはしなかった（そしておそらく、いずれにせよ論拠の重要性を正しく認識していなかった）。

The Chartalist theory, in its most general form, is perhaps best described in George Friedrich Knapp's 1924 work, The State Theory of Money.
表券主義者の理論はおそらく、その最も一般的な形で、1924 年のジョージ・フリードリヒ・ナップの著作「貨幣の国家理論」で最もよく説明されている。

As the title suggests, the state plays a central role in the development and establishment of money.
タイトルが示すように、国家は貨幣の開発と確立において中心的な役割を果たす。

Knapp's exposition is not easily summarised owing to the exceedingly complex system of terms he invented for his analysis.
ナップの説明は、彼が分析のために考案した言語体系が非常に複雑であるため、簡単に要約することはできない。

His fundamental insight, however, is easily conveyed: '[T]he money of a State is ... what is accepted at public pay offices', and 'the standard is not chosen for any properties of the metals' (Knapp, 1924, p. viii).
しかし、彼の基本的な洞察は簡単に伝えることができる。「国家の貨幣は…公的な支払いの機関で受け入れられるもの」そして「その基準は金属の特性によって選ばれるのではない」(Knapp, 1924, p. viii)。

Knapp's position is, therefore, directly opposed to the Metallist's.
したがって、ナップの立場は金属主義者の立場と正反対である。

For him, the state determines the money of the economy by declaring what it will accept in payment to itself.
彼にとって、国家はそれ自体の支払いで何を受け入れるのかを言明することによって、経済の貨幣を決定する。

〈執筆・編集者〉

阿部佳悟 岡本直樹 鈴木駿輔 廣間淳人 前田日向 山下貴之（敬称略/五十音順）

# 2021 年度 春学期 活動記録

発行日 2021 年 7 月 28 日

発行者 早稲田大学文化構想学部

社会構築論系現代共生理論